

全ての生徒に共通に育むべき資質・能力と、高等学校各教科の必修科目の関係等 (仮案・調整中)

	個別の知識や技能 (何を知っているか、 何ができるか)	教科等の本質に根ざした 見方や考え方等 (知っていること・できることをどう使うか)	情意、態度等に 関わるもの (どのように社会・世界と関わり よりよい人生を送るか)	資質・能力の育成のために 重視すべき学習過程等の例
国語	話すこと・聞くことにおける知識・技能 書くことにおける知識・技能 (読むこと・みること) 国語の特質に関する理解	実社会・実生活に生きる国語の能力	国語を尊重してその向上を図る態度など	【話すこと・聞くこと】 目的理解・課題発見 話題設定 取材 構成 対話 評価 交流 振り返り 音声表現の活用 【書くこと】 目的理解・課題発見 題材設定 取材・表現の工夫 構成 記述 推敲 交流 振り返り 文章表現の活用
	読むことにおける知識・技能 古典を含む日本の言語文化等に関する理解 国語の特質に関する理解	伝統的な言語文化を今に生かし活用できる能力	言語文化に対する関心など	【読むこと】 目的理解 読書行為の課題設定 選書・情報選択 表現に即した理解 テキストの解釈 考えの形成 交流 振り返り 読書・情報活用
地理	地図や地理情報システムなどの地理的な技能 地球規模の自然システム、社会・経済システムの理解	位置と分布、場所、地域などの空間概念を捉え追究する地理的な見方や考え方	持続可能な社会づくりに向けて、地球的課題や地域的課題の解決を模索する態度など	地理的事象の認識 課題の設定 地図や統計資料を用いた追究や調査 地図化による表現や図表等によるまとめ 振り返り
歴史	日本及び世界の歴史の考察に関わる概念の理解 歴史に関わる諸資料を活用する技能	自国の歴史、グローバルな歴史を横断的・相互的に捉え、諸資料を活用して、歴史に関わる諸課題を考察する力	国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚など	歴史的事象の理解 学習課題の設定 諸資料に基づく調査・考察 まとめ・表現・討論等 振り返り

74

	個別の知識や技能 (何を知っているか、 何ができるか)	教科等の本質に根ざした 見方や考え方等 (知っていること・できることをどう使うか)	情意、態度等に 関わるもの (どのように社会・世界と関わり よりよい人生を送るか)	資質・能力の育成のために 重視すべき学習過程等の例
公民	現代社会の諸課題を捉え、考察し選択・判断していくために必要な概念的な枠組み等の理解	国家・社会の形成者として必要な選択・判断を主体的に行い、他者と協働しながら様々な課題を解決していく力	社会参画への意欲や態度 現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚など	課題の発見・解決に向けた実践的な学習 (討論、ディベート、模擬投票、模擬裁判など) 振り返り インターンシップ等の準備と振り返り
数学	数学における基本的な概念や原理・法則の体系的理解 事象を数学化したり、数学的に解釈・表現したりすること	事象を数学的に考察・表現し、数学的論拠に基づいて判断し問題を解決したり、数学的な考え方を発展させたりする力	数学のよさの認識、数学的論拠に基づき判断する態度など	疑問や問いの発生 定式化による問題設定 問題の理解 解決の計画、実行、検討 新たな疑問や問い、推測などの発生
理科	理科における基本的な概念や原理・法則の体系的理解 探究のために必要な実験・観察等の技能	自然の事象を目的意識を持って観察・実験し、科学的に探究する力	科学的な自然観など	自然事象の把握 問題の設定 予想・仮説の設定 検証計画の立案 観察・実験の実施 結果の処理 推論 表現
保健体育	体の動かし方や技能、体力の高め方を理解し、運動の技能として発揮したり、身体表現したりすること スポーツに関する科学的知識や文化的意義等の理解	自己や仲間の運動課題を解決する過程などを通して、生涯にわたって、豊かなスポーツライフを継続できる資質や能力	公正、協力、責任、参画に対する意欲及び健康・安全を確保することで運動の楽しさや喜びを深く味わうことのできる態度	運動観察を通して課題を指摘したり、課題解決のアイデアを伝え合ったりする活動 個人やグループの課題解決に向けて、合意形成に貢献する活動 課題解決の過程を踏まえ、目標や課題の設定と練習方法を選択・実践し見直す活動 ICT、学習カード等の活用による課題や作戦、戦術等を分析するなど、運動観察や自己評価、相互評価する活動 競技会や発表会の主体的な企画や運営 など
	個人及び社会生活における健康・安全についての総合的な理解	健康の事象を科学的に思考・判断し、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し改善していく能力	自他の健康の保持増進のためにコミュニケーションを図ったり、主張したりする態度、健康な社会づくりに参画する態度など	健康課題の発見 健康情報の収集・分析 課題解決の方法の検討 個人及び社会生活への適用・応用・発信

75

	個別の知識や技能 (何を知っているか、 何ができるか)	教科等の本質に根ざした 見方や考え方等 (知っていること・できることをどう使うか)	情意、態度等に 関わるもの (どのように社会・世界と関 わりよりよい人生を送るか)	資質・能力の育成のために 重視すべき学習過程等の例	
芸術	音楽	【表現】 ・音楽表現の工夫に関すること ・工夫したことを歌唱、器楽、創作で表すための技能 ・表現の活動を通じた、音楽文化についての理解に関すること 【鑑賞】 ・音楽がもつよさや美しさなどを味わうことに関すること ・鑑賞の活動を通じた、音楽文化についての理解に関すること	【表現の能力】音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感じながら、音楽表現を工夫し、表現意図をもち、それらを生かした音楽表現をするための技能を身に付け、創造的に表す能力 【鑑賞の能力】音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感じながら、解釈したり価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを楽しむ能力	・音楽への関心・意欲・態度 ・感性 ・生涯にわたり音楽を愛好する心情 ・音楽文化を尊重する態度 ・音楽環境への関心 ・豊かな情操 など	【表現の活動】 ・曲想を感じ取る ・表現のイメージをもつ ・音楽表現を試しながら表現意図をもつ、表現意図を生かした音楽表現をする 【鑑賞の活動】 ・音色の特徴と表現上の効果とを関わらせて感じ取る ・文化的・歴史的背景などを理解する ・根拠をもって批評する
	美術	【表現】 ・発想や構想することに関すること ・創造的に表現するための技能 【鑑賞】 ・作品などのよさや美しさなどを感じ取り味わうことに関すること ・美術文化についての理解に関すること	【表現の能力】感性や想像力を働かせて、主題を生成し、創造的な構想を練り、それらをよりよく表現するために必要な技能を身に付け活用し、創意工夫して表現する能力 【鑑賞の能力】美術や美術文化を幅広く理解し、そのよさや美しさを創造的に感じ取り味わう能力	・美術への関心・意欲・態度 ・感性 ・生涯にわたり美術を愛好する心情 ・美術文化を尊重する態度 ・豊かな情操 など	【表現の活動】 ・主題を生成し、表現形式の特性などを考え、構想を練る ・美的直感力や柔軟な思考力、判断力を働かせて発想し、構想を練る ・意図に応じて材料や用具の特性を生かして表現する ・自己が生成した主題を追求する 【鑑賞の活動】 ・言葉で考えを整理したり、批評し合い議論したりすることで見方や感じ方を広げる ・自己を見つめ、自分の価値意識をもって美術や美術文化を捉える
	工芸	【表現】 ・発想や構想することに関すること ・創造的に表現するための技能 【鑑賞】 ・作品などのよさや美しさなどを感じ取り味わうことに関すること ・工芸の伝統と文化についての理解に関すること	【表現の能力】感性や想像力を働かせて、心豊かな発想をし、よさや美しさなどを考え制作の構想を練り、それらをよりよく制作するために必要な技能を身に付け活用し、創意工夫して表現する能力 【鑑賞の能力】工芸や工芸の伝統と文化を幅広く理解し、そのよさや美しさを創造的に感じ取り味わう能力	・工芸への関心・意欲・態度 ・感性 ・生涯にわたり工芸を愛好する心情 ・工芸の伝統と文化を尊重する態度 ・豊かな情操 など	【表現の活動】 ・自己の思いや社会的な視点に立ち、美しさや機能性を求め発想し、構想を練る ・客観性、柔軟性を備えた観察力や理解力を働かせて発想し、構想を練る ・制作方法を理解し、意図に応じて材料や用具を活用したり、手順や技法を吟味し、創意工夫したりして制作する 【鑑賞の活動】 ・言葉で考えを整理したり、批評し合い議論したりすることで見方や感じ方を広げる ・心豊かな生活や社会を創造していくことの意義を理解し、自分の価値意識をもって工芸や工芸の伝統と文化を捉える
	書道	【表現】 ・書表現の構想や工夫することに関すること ・創造的に表現するための技能 【鑑賞】 ・作品などのよさや美しさなどを感じ取り味わうことに関すること ・書の伝統と文化についての理解に関すること	【表現の能力】書表現の諸要素を感じ、感性を働かせながら、自らの意図に基づいて構想して表現を工夫し、効果的な表現の技能を身に付け表す能力 【鑑賞の能力】文字や書の伝統と文化について幅広く理解し、その価値を考え書のよさや美しさを創造的に味わう能力	・書への関心・意欲・態度 ・感性 ・生涯にわたり書を愛好する心情 ・書の伝統と文化を尊重する態度 ・豊かな情操 など	【表現の活動】 ・書の古典がもつ表現の諸要素を感じ、自らの意図に基づいて作品を構想し表現を工夫する ・創造的な書表現の技能を身に付け、用具・用材の特徴を生かして、効果的に表現する 【鑑賞の活動】 ・感じたことを確かな言葉で伝え合い、書に対する見方や感じ方を広げる ・歴史的背景や生活と社会との関わりから文字や書の伝統と文化への理解を深める

	個別の知識や技能 (何を知っているか、 何ができるか)	教科等の本質に根ざした 見方や考え方等 (知っていること・できることをどう使うか)	情意、態度等に 関わるもの (どのように社会・世界と関わり よりよい人生を送るか)	資質・能力の育成のために 重視すべき学習過程等の例
外国語	聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと	日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力	他者を尊重し、聞き手・話し手・読み手・書き手に配慮しながら、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度など	聞いたり読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする技能統合型の学習 4技能を総合的に活用する言語活動（スピーチ、プレゼンテーション、ディベートやディスカッションなど）を通じた学習 多様な言語使用場面における学習 実社会や実生活の中で、自ら課題を発見し、主体的・協働的に探究し、外国語で考えや気持ちなどを互いに伝え合うことを目的とした学習
家庭	自立した生活に必要な知識や技術	自立した生活者として生活上の課題を解決する実践力	家庭や地域の生活を見つめ、主体的に課題を発見し、工夫改善充実しようとする態度など	生活の課題発見 解決方法の検討と計画 実習、観察・実験、調査・研究 実践活動の評価 家庭・地域での実践
情報	情報や情報技術に関する科学的な理解 情報技術や情報機器を用いて問題を発見し解決する知識と技能	情報に関する科学的な見方や考え方を身に付け、情報技術を効果的に活用して問題を発見し解決する力	情報社会に主体的に参画しその発展に寄与する態度など	ネットワークを用いた情報の収集・発信 課題解決の実践と評価 プログラミングを用いた問題解決 データベースを用いた問題解決 情報社会の課題についての調査や討議 情報モラルの理解と実践

最近の英語教育改革に関する経緯

【文部科学省の動向】

教育再生実行会議

第3次提言

「これからの大学教育等の在り方について」
(H25.5.28)

○ 国は、**小学校の英語学習の抜本的拡充(実施学年の早期化、指導時間増、教科化、専任教員配置等)や中学校における英語による英語授業の実施、初等中等教育を通じた系統的な英語教育について、学習指導要領の改訂も視野に入れ、諸外国の英語教育の事例も参考にしながら検討**する。国、地方公共団体は、少数での英語指導体制の整備、JETプログラムの拡充等によるネイティブ・スピーカーの配置拡大、イングリッシュキャンプなどの英語に触れる機会の充実を図る。

第2期教育振興基本計画(H25～29)

第2部今後5年間に実施すべき教育上の方策～四つの基本的方向性に基づく、8の成果目標と30の基本施策～ 2. 未来への飛躍を実現する人材の養成
(H25. 6. 14閣議決定)

成果目標5(社会全体の変化や新たな価値を主導・創造する人材等の養成)
※グローバル人材の養成(略)

【成果指標】

<グローバル人材関係>

①国際共通語としての英語力の向上

・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標(中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級程度～2級程度以上)を達成した中高校生の割合50%

基本施策16

外国語教育、双方向の留学生交流・国際交流、大学等の国際化など、グローバル人材育成に向けた取組の強化【主な取組】

16-1 英語をはじめとする外国語教育の強化

新学習指導要領の着実な実施を促進するため、外国語教育の教材整備、英語教育に関する優れた取組を行う拠点校の形成、外部検定試験を活用した生徒の英語力の把握検証などによる、戦略的な英語教育改善の取組の支援を行う。また、英語教育ポータルサイトや映像教材による情報提供を行い、生徒の英語学習へのモチベーション向上や英語を使う機会の拡充を目指す。大学入試においても、高等学校段階で育成される英語力を適切に評価するため、TOEFL等外部検定試験の一層の活用を目指す。

また、**小学校における英語教育実施学年の早期化、指導時間増、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業の実施について、検討を開始し、逐次必要な見直しを行う。**教員の指導力・英語力の向上を図るため、採用や自己研鑽等での外部検定試験の活用を促すとともに、海外派遣を含めた教員研修等を実施する。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
(H25.12.13文科省発表)

初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、**小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。**

1. グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方

○小学校(中学年):活動型

・週1～2コマ程度・コミュニケーション能力の素地を養う・学級担任を中心に指導

○小学校(高学年):教科型

・週3コマ程度(「モジュール授業」も活用)
・初歩的な英語の運用能力を養う
・英語指導力を備えた学級担任に加えて専科教員の積極的活用

○中学校

・身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養う
・授業を英語で行うことを基本とする

○高等学校

・幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者となる程度流暢にやりとりができる能力を養う
・授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化(発表、討論、交渉等)

※小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養う

※日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実(伝統文化・歴史の重視等)

英語教育の在り方に関する有識者会議 (H26.2～26.9)

今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～(H26.9末)

改革1. 国が示す教育目標・内容の改善

○ 学習指導要領では、小・中・高を通して
1.各学校段階の学びを円滑に接続させる、
2.「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標(4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む)を示す(具体的な学習到達目標は各学校が設定)。

小学校:

・**中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める。**
・高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。学習の系統性を持たせるため教科として行うことが求められる。
・**小学校の英語教育に係る授業時数や位置づけなどは、今後、教育課程の全体の議論の中で更に専門的に検討。**

中学校:

・**身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の養成を重視する。**

高等学校:

・**幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高める。**

中央教育審議会

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」H26文科初第852号(H26.11.20)

○ グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇(ちゆうちよ)せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力や、我が国の伝統文化に関する深い理解、他文化への理解等をどのように育んでいくべきか。

特に、国際共通語である英語の能力について、文部科学省が設置した「**英語教育の在り方に関する有識者会議**」の報告書においてまとめられた提言も踏まえつつ、例えば以下のような点についてどのように考えるべきか。

・**小学校から高等学校までを通じて達成を目指す教育目標を、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、4技能に係る一貫した具体的な指標の形式で示すこと**

・**小学校では、中学年から外国語活動を開始し音声に慣れ親しませるとともに、高学年では、学習の系統性を持たせる観点から教科として行い、身近で簡単なことについて互いの考えや気持ちを伝え合う能力を養うこと**

・**中学校では、授業は英語で行うことを基本とし、身近な話題について互いの考えや気持ちを伝え合う能力を高めること**

・**高等学校では、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高めること**

【背景】

「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」<抄>(平成25年6月14日)

○(略)また、「鉄は熱いうちに打て」のことわざどおり、初等中等教育段階からの英語教育を強化し、高等教育等における留学機会を抜本的に拡充し、世界と戦える人材を育てる。

④世界と戦える人材を育てる

(i)初等中等教育段階からの英語教育を強化する。このため、**小学校における英語教育実施学年の早期化、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業実施について検討**する。

⑦グローバル化等に対応する人材力の強化

・**小学校における英語教育(小学校5、6年生における外国語活動の成果を今年度中に検証するとともに、実施学年の早期化、指導時間増、教科化、指導体制の在り方等や、中学校における英語による英語授業の実施について、今年度から検討を開始し、逐次必要な見直しを行う。**

「日本再興戦略」改訂2014-未来への挑戦-<抄>(平成26年6月24日)

○(略)また、初等中等教育段階からの英語教育の強化のため、**小学校英語の早期化等を行う拠点への支援や教員の英語指導力向上のための取組を開始**した。

○**小学校における英語教育実施学年の早期化等に向けた学習指導要領の改訂を2016年度に行うことを目指し、指導体制の強化、外部人材の活用促進など、初等中等教育段階における英語教育の在り方について検討を行い、本年秋を目途に取りまとめる。**学校現場等における外国人活用の抜本強化を図り、実践的な英語教育を実現させる。あわせて、在外教育施設における質の高い教育の実現及び海外から帰国した子供の受入れ環境の整備を進める。

今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（概要）

～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～

英語教育の在り方に関する有識者会議 平成26年9月

- 文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（平成25年12月）の具体化のため、平成26年2月～9月に9回開催（そのほか計5回の小委員会を開催）。
- 改革のうち、教育課程や教員養成等については、中央教育審議会等における全体的な議論の中で更に検討を要する。

改革を要する背景

- グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題。
- 我が国の英語教育は、現行の学習指導要領を受けた改善も見られるが、特にコミュニケーション能力の育成について更なる改善を要する課題も多い。東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020（平成32）年を見据え、小・中・高を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める。並行して、これに向けた準備期間の取組や、先取りした改革を進める。

改革1. 国が示す教育目標・内容の改善

- 学習指導要領では、小・中・高を通して①各学校段階の学びを円滑に接続させる、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標（4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む）を示す（資料参照）（具体的な学習到達目標は各学校が設定）。
- 高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。あわせて、生徒の英語力を把握し、きめの細かな指導の改善・充実や生徒の学習意欲の向上につなげるため、従来から設定されている英語力の目標（学習指導要領に沿って設定される目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度から2級程度以上）を達成した中・高生の割合50%）だけでなく、高等学校段階の生徒の特性・進路等に応じた英語力、例えば、高等学校卒業段階で、英検2～準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定し、生徒の英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。
 - ・小学校： 中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める。高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。学習の系統性を持たせるため教科として行うことが求められる。小学校の英語教育に係る授業時数や位置づけなどは、今後、教育課程の全体の議論の中で更に専門的に検討。
 - ・中学校： 身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。文法訳読に偏ることなく、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション能力の養成を重視する。
 - ・高等学校： 幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高める。

79

改革2. 学校における指導と評価の改善

- 英語学習では、失敗を恐れず、積極的に英語を使おうとする態度を育成することが重要。中学校・高等学校では、主体的に「話す」「書く」などを通じて互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開することが重要。また、生徒が英語に触れる機会を充実し、中学校の学びを高等学校へ円滑につなげる観点から、中学校においても、生徒の理解の程度に応じて、授業は英語で行うことを基本とする。
- 各学校は、学習指導要領を踏まえながら、4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標を設定（例：CAN-DO形式）し、指導・評価方法を改善。併せて主体的な学びにつながる「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を重視し、観点別学習状況の評価において、例えば、「英語を用いて～ができる」とする観点を「英語を用いて～しようとしている」とした評価を行うことによって、生徒自らが主体的に学ぶ意欲や態度などを含めた多面的な評価方法を検証・活用。
- 小学校高学年で教科化する場合、適切な評価方法については先進的取組を検証し、引き続き検討。

改革3. 高等学校・大学の英語力の評価及び入学者選抜の改善

- 生徒の4技能の英語力・学習状況の調査・分析を行い、その結果を、教員の指導改善や生徒の英語力の向上に生かす。
- 入学者選抜における英語力の測定は、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要。
- 各大学等のアドミッション・ポリシーとの整合性を図ることを前提に、入学者選抜に、4技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進。そのため、学校、テスト理論等の専門家、資格・検定試験の関係団体等からなる協議会を設置し、
 - ・適切な資格・検定試験の情報提供、
 - ・指針づくり（学習指導要領との関係、評価の妥当性、換算方法、受験料・場所、適正/公正な実施体制等）、
 - ・試験間の検証、英語問題の調査・分析・情報提供等の取組を早急に進めることが必要。
- 「達成度テスト」の具体的な検討を行う際には、連絡協議会の取組を参考に英語の資格・検定試験の活用の在り方も含め検討。

改革4. 教科書・教材の充実

- 小学校高学年で教科化する場合、学習効果の高いICT活用も含め必要な教材等を開発・検証・活用。
- 主たる教材である教科書を通じて、説明・発表・討論等の言語活動により、思考力・判断力・表現力等が一層育成されるよう、次期学習指導要領改訂においてそのような趣旨を徹底するとともに、教科用図書検定基準の見直しに取り組む。
- 国において音声や映像を含めた「デジタル教科書・教材」の導入に向けた検討を行う。
- ICT予算に係る地方財政措置を積極的に活用し、学校の英語授業におけるICT環境を整備。

改革5. 学校における指導体制の充実

- 地域の大学・外部専門機関との連携による研修等の実施や、地域の指導的立場にある教員が英語教育担当指導主事や外部専門家等とチームを組んで指導に当たることなどにより、地域全体の指導体制を強化。地域の中心となる英語教育推進リーダー等の養成、定数措置などの支援が必要。
- 各学校では、校長のリーダーシップの下で、英語教育の学校全体の取組方針を明確にし、中核教員等を中心とした指導体制の強化に取り組むことが重要。
- 小学校の学びを中学校へ円滑に接続させるため、小中連携の効果が期待される相互乗り入れ授業、カリキュラムづくり、指導計画作成などを行う合同研修など実質的な連携促進が必要。
- 小学校の中学年では、主に学級担任が外国語指導助手（ALT）等とのチーム・ティーチングも活用しながら指導し、高学年では、学級担任が英語の指導力に関する専門性を高めて指導する、併せて専科指導を行う教員を活用することにより、専門性を一層重視した指導体制を構築。小学校教員が自信を持って専科指導に当たることが可能となるよう、「免許法認定講習」開設支援等による中学校英語免許取得を促進。英語指導に当たる外部人材、中・高等学校英語担当教員等の活用を促進。
- 2019（平成31）年度までに、すべての小学校でALTを確保するとともに、生徒が会話、発表、討論等で実際に英語を活用する観点から中・高等学校におけるALTの活用を促進。
- 大学の教員養成におけるカリキュラムの開発・改善が必要。
 - 例えば、
 - ・小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学、英語指導法、チーム・ティーチングを含む模擬授業、教材研究、小・中連携に対応した演習や事例研究等の充実、
 - ・中・高等学校において授業で英語によるコミュニケーション活動を行うために必要な英語音声学、第2言語習得理論等を含めた英語学、4技能を総合的に指導するコミュニケーションの科目の充実等を、英語力・指導力を充実する観点から改善することが必要。今後、教員養成の全体の議論の中で検討。
 - 同時に、小学校の専科指導や中・高等学校の言語活動の高度化に対応した現職教員の研修を確実に実施。

80

	小学校高学年	中学校		
教科等の目標	外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、 <u>身近で簡単なこと</u> について外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。 <ポイント> ・身近で簡単なこと ・コミュニケーション能力の基礎	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、 <u>身近な話題</u> についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。 <ポイント> ・身近な話題 ・理解、表現、情報交換できるコミュニケーション能力		
英語等の目標	<英語> (1)身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。 (2)身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 (3)アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てる。 (4)アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てる。 <ポイント> ・身近で簡単なこと ・初歩的な英語	<英語> ○身近な話題について話される英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。 ○身近な話題について、英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。 ○身近な話題について書かれた英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。 ○身近な話題について、英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。 <ポイント> ・身近な話題 ・自分の考えなどの表現 ・相手の意向などの理解		
指標形式の目標	「話すこと」(発表) Spoken Production【SP】 【SP1】自分の考えや気持ち、事実などを、聞き手を意識しながら初歩的な英語で伝えることができるようにする。 【SP2】与えられたテーマについて初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができるようにする。 <ポイント> ・相手を意識 ・初歩的な英語	「話すこと」(やりとり) Spoken Interaction【SI】 ○聞いたことに相づちをうったり、感想を言ったりすることができるようにする。	「話すこと」(発表) Spoken Production【SP】 【SP1】自分の考えや気持ち、事実などを、聞き手を意識しながら英語で伝えることができるようにする。 【SP2】自分の意見や主張を基に、与えられたテーマについて短いスピーチをすることができるようにする。 <ポイント> ・「発表」:小学校からの接続 ・「やりとり」:話し合いと伝え合い	「話すこと」(やりとり) Spoken Interaction【SI】 ○聞いたり読んだりしたことなどについてほかの人と話し合い、理解したことを確認したり、意見を伝え合ったりすることができるようにする。

81

次期学習指導要領「外国語」における国の指標形式の主な目標(イメージ)案(秋以降、専門的に検討予定)

- > 国の目標では、小・中・高等学校の学びを円滑に接続させる、②「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標(指標形式の目標を含む)を示す。
- > 学校では、英語を使って何ができるようになるかという観点からCAN-DO形式の学習到達目標を設定し、それに基づく指導と学習評価(筆記テストのみならず、スピーチ、インタビューテスト、エッセー等のパフォーマンス評価、観察等)

※CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会(Council of Europe)が発表。

校種	科目(イメージ)	CEFRレベル	聞くこと	読むこと	話すこと(やり取り)	話すこと(発表)	書くこと
高等学校	4技能総合型 複数の技能を統合させた言語活動が中心 発展させた内容 (選択科目) 発信能力向上のための言語活動(プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション等)が中心 (必修科目)	B1	・ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身近な話題に関する比較的長い会話や身近な事柄に関する説明の概要や要点を理解できるようにする。	・身近な話題に関する比較的短い記事、レポート、資料の概要や要点を理解し、必要な情報を読み取ることができるようにする。	・身近な話題や知識のある話題について、平易な英語を用いて情報や意見を交換することができるようにする。	・時事問題や社会問題について、具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて話すことができるようにする。	・関心のある分野の話題について、つながりのある文章で具体的に説明するとともに、自分の意見を加えて書くことができるようにする。
		A2	・ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身近な話題に関する短い会話や身近な事柄に関する短い説明の概要や要点を理解できるようにする。	・身近な話題に関して平易な英語で書かれた短い説明を読み、概要や要点を理解できるようにする。	・日常生活に関する事柄や個人的な関心事(趣味、学校など)について、ある程度準備をすれば会話に参加することができるようにする。	・身近な話題について、簡単な語句や文を用いて、自分の意見やその理由を短く述べることができるようにする。	・身近な事柄(自分、学校、地域など)について、簡単な語句や文を用いて、短い説明文を書くことができるようにする。
中学校	英語 小学校での学習内容の活用を通じた定着を含む	A1	・ゆっくりはっきりと、馴染みのある発音で話されれば、身の回りの事柄(自分、学校、地域など)に関するごく短い会話や説明を理解することができるようにする。	・興味のある話題に関して平易な英語で書かれたごく短い説明を読み、イラストや写真を参考にしながら、概要を理解することができるようにする。	・ごく身近な話題であれば、基本的な表現を用いて簡単な質疑応答をすることができるようにする。	・身近な話題について、発表内容を準備した上で、簡単な語句を用いて複数の文で意見を述べることができるようにする。	・自分に関するごく限られた情報(名前、年齢、趣味、好き嫌いなど)を、簡単な語句や文で書くことができるようにする。
		(Pre-A1)	ゆっくりとはっきりと、繰り返し話されれば、 ・短い簡単な指示や挨拶を理解することができるようにする。 ・身近で具体的な事柄を表す単語を聞き取ることができるようにする。	・身近で具体的な事柄を表す単語の意味を理解することができるようにする。 ・アルファベットを見て識別し、発音できるようにする。	・相手のサポートがあれば、個人的な関心事(趣味、学校など)についての質問に答えることができるようにする。 ・日常の挨拶をしたり、挨拶に応答したりすることができるようにする。	・自分に関するごく限られた情報(名前、年齢、好き嫌いなど)を、簡単な語句を用いて伝えることができるようにする。 ・定型表現を用いて、簡単な挨拶ができるようにする。	・例文を参考にしながら、慣れ親しんだ語句や文を書くことができるようにする。 ・アルファベットの大きな文字と小文字をブロック体で書くことができるようにする。
小学校	英語(教科型) 4技能(聞く、話す、読む、書く) 慣れ親しみから「気付き」へ 英語(活動型) 2技能(聞く、話す)						

複数の技能を統合的に扱う言語活動を通して求められる英語力を身に付ける

次期学習指導要領の5年生の年間指導計画のイメージ(秋以降、専門的に検討予定)

単元名	コミュニケーションの場面	言語材料	目標例
Lesson 1 どうぞよろしく	自己紹介	hello, good-bye, see you. 等	自己紹介をしたり、相手の自己紹介を聞いて反応しようとする。 ALTの自己紹介を聞いて自分のことを簡単な英語で紹介することができる。 名前を正確に英語で書くことができる。
Lesson 2 修学旅行の準備をしよう	学校の学習・活動	乗り物 What do you have? I have ~. 等	身の回りの物をヒントを手掛かりに読もうとしたり、英語で正確に書き写そうとする。 何を持っているか尋ねたり、答えたりすることができる。
Lesson 3 アルファベットには音がある	学校での学習や活動	アルファベットの文字 身の回りの物	アルファベットの音を言うことができる。 アルファベットには読み方と音があること、日本語と英語では文字と音の関係が違うことに気づく。(カタカナ、ローマ字含む)
Lesson 4 世界旅行に行こう	学校での学習や活動	国名、動作 Where do you want to go? I want to go to ~. 等	行きたい国名を正確に書き写したり、簡単な英語で説明できる。 世界の国名を眺んだり書いたりして、様々な文化があることに気付く。
Lesson 5 ツアーコンダクターになろう	学校での学習や活動	国名、地名、動作 Where do you want to go? You can see/eat ~ 等	英語で相手に対し道案内ができる。 行きたい国名を正確に書き写して説明できる。
Lesson 6 夢宣言	家庭での生活・仕事	職業名 What do you want to be? I want to be ~.	世界には様々な夢をもつ同年代の子がいることを知る。 どのような職業に就きたいか尋ねたり、答えたりできる。 職業名を正確に書き写すことができる。
Lesson 7 思い出アルバムを作ろう	学校での学習や活動	行事名 様子を表す語 My favorite event is ~. Because it is ~.	思い出の行事について書いて積極的に説明したり、反応して聞いたりすることができる。 行事名を正確に書き写すことができる。
Lesson 8 A Letter to ...	学校での学習や活動	動物 ~ is chasing ~. I like/play/have/ 等	好きなものや、日常生活について語感を替えて表現することができる。 英語と日本語とは語順が違うことに気付く。
Lesson 9 中学校ってどんなところ?	学校での学習や活動	時刻、教科名、部活動名 What time do you get up?	まとまった話を聞いたり、相手意識を持って発表したりしようとする。 興味のある教科など身近なことを正確に書き写して伝えようとする

「モジュール学習(帯学習)」対応可能活動

① 関係
アルファベットの文字の認識を深める活動
①読み方を繰り返し言う。
例:かきた取り、アルファベットゲーム、など
②四線上に繰り返し書く。
③アルファベットチャンツを言う

② 関係
日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す活動
④小文字を四線上に繰り返し書く。

② 関係
日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す活動
①音、単語の認識を深める:
②小文字を四線上に繰り返し書く、正確に書く。

効果的なモジュール学習(帯学習)の時間をどの程度設定するかについて、専門的見地からの検討を経て、年内～年明けに結論

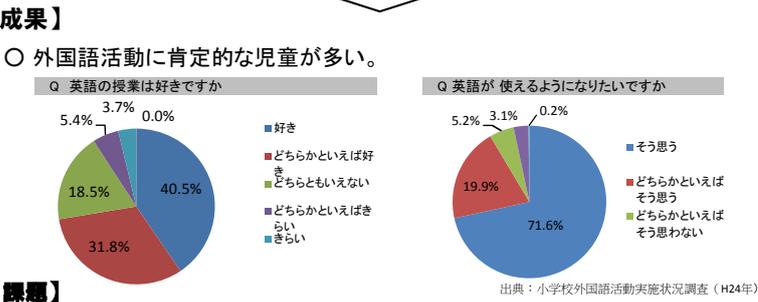
各単元の内、まとまりのある学習を行った上で、短時間学習活動の「繰り返し学習」を通して、アルファベットの文字、語いや表現の定着を図る

補助教材の活用
アルファベット大文字・小文字カード
ワークシート
など
授業の中で新たに扱う「単語」や「表現」などの「繰り返し学習」を行うことを通じて定着を図る
↑
ゲーム等を通して繰り返し
アルファベットデジタル教材
ワークシート
など

小学校外国語活動(5, 6年生)の成果・効果について

平成23年度より、小学校高学年(5, 6年生)に外国語活動(週1コマ)を導入後、
 ○児童生徒:小学生の72.3%(71.7%)が「英語の授業が好き」、91.5%(91.5%)が「英語が使えるようになりたい」、中学1年生の8割以上が、小学校の外国語活動で行った「アルファベットを読むこと」や「英語で簡単な会話をすること」が「中学校で役立っている」と回答。
 ○小学校教員:導入前と比べ、高学年児童に「成果や変容がみられた」と感じる教員が76.6%(76.5%)
 ○中学校教員:導入前と比べ、中1の生徒に「成果や変容がみられた」と感じる教員が65.3%(77.8%)
 その変容として、外国語によるコミュニケーションへの積極的な関心・意欲・態度のみならず、英語を聞いたり話したりする力もついてきていると挙げている。
 (出典:平成26年度小学校外国語活動実施状況調査)
 ※上記()内の数値は、H23,24実施の調査結果

【現状】
目標:外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。



【課題】

○ 中学1年生の約8割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文を書く」とをもっとしておきかったと回答。
 ○ ①ALT等と打合せや教材研究をする時間の確保、②外国語活動の指導力、指導力向上のための研修機会が不十分であると感じている。

◆ 中学1年生は、小学校外国語活動の授業で学んだことが中学校の英語の授業で役だったと考えている。特に「話す」「聞く」ことで役立ったと回答。

	構成比
英語で簡単な会話をすること	82.8% (80.5%)
英語の発音を練習すること	75.8% (73.7%)
友だちや先生などが英語で話しているのを聞くこと	73.2% (71.7%)
英語で自分のことや意見を言うこと	55.5% (53.9%)
英単語を読むこと	72.9% (68.4%)
英語の文を読むこと	60.8% (53.3%)

出典:小学校外国語活動実施状況調査(H26年)
 ※()内の数値は、H24実施の調査結果

◇ 東京都における小学校外国語活動の成果

東京都中学校英語教育研究会より	東京都A区より
○ 小学校外国語活動の影響で臆することなく、コミュニケーションができる生徒が増加 ○ 小学校外国語活動の効果で、音声に慣れている。 ○ 低・中学年で週2時間外国語活動を行っている地区では中学に入った段階で文字が読める・書ける。	○ 小学校外国語活動の影響で臆することなく、コミュニケーションができる生徒が増加 ○ コミュニケーションへの関心・意欲・態度の高まり ○ 小学校外国語活動の効果で、音声に慣れている。

(参考)主な課題
 ○ 中学校入学以前に、「英語は苦手」と感じる生徒がいる。

小学校外国語活動(5, 6年生)の成果・効果について (中学1年生対象調査結果より)

出典: 小学校外国語活動実施状況調査(H26) 小学校5, 6年児童約2万人、中学校1・2年生徒約2万人、小学校管理職・学級担任、中学校管理職・外国語科担当教員それぞれ約3千人を対象に調査

小学校外国語活動が中学校でどのように役立ったか (中1)

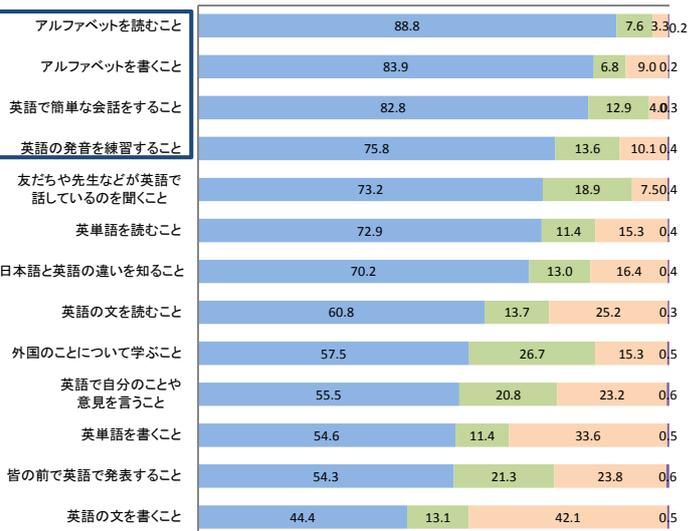
- 「小学校の外国語活動で学んだことの中で、中学校の英語の授業で役に立ったこと」として、生徒の88.8%が「アルファベットを読むこと」(86.8%)、83.9%が「アルファベットを書くこと」(80.7%)、82.8%が「英語で簡単な会話をする事」(80.5%)、75.8%が「英語の発音を練習すること」(73.7%)、と回答。

()内は、24年度調査結果

Q. 小学校の英語の授業で学んだことの中で、中学校の英語の授業で役に立ったことはありますか。(単数回答)

■役に立った ■役に立たなかった ■小学校でやっていないと思う ■無回答

0% 20% 40% 60% 80% 100%



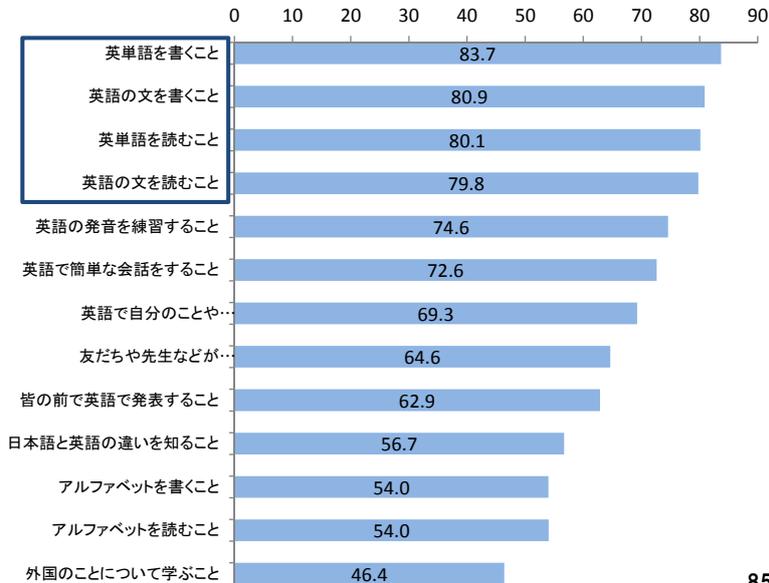
小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと (中1)

- 「小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと」として、生徒の83.7%が「英単語を書くこと」(81.7%)、80.9%が「英語の文を書くこと」(78.6%)、80.1%が「英単語を読むこと」(77.9%)、79.8%が「英語の文を読むこと」(77.6%)、と回答。

()内は、24年度調査結果

Q. 以下の項目は、小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったと思いますか。

※「そう思う」「そう思わない」「無回答」のうち、「そう思う」と回答した割合



85

中学校における英語科授業の取組状況 (中学2年生、中学校教員対象調査結果より)

出典: 小学校外国語活動実施状況調査(H26) 小学校5, 6年児童約2万人、中学校1・2年生徒約2万人、小学校管理職・学級担任、中学校管理職・外国語科担当教員それぞれ約3千人を対象に調査

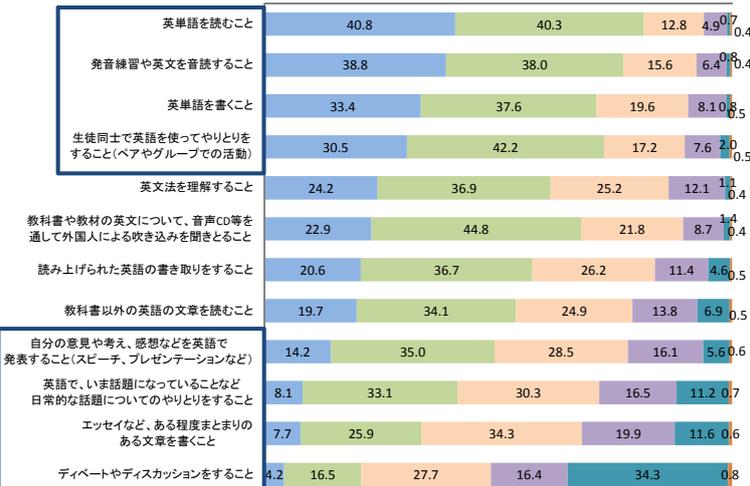
英語の授業での取組状況 (中2)

- 授業でどの程度できているかについて、生徒の81.1%が「英単語を読むことができている、ほぼできている」、76.8%が「発音練習や英文を音読することができている、ほぼできている」と回答。
- 一方で、33.6%が「エッセイなど、ある程度まとまりのある文章を書くことができている、ほぼできている」、20.7%が「ディベートやディスカッションをすることができている、ほぼできている」と回答。

Q. 英語の授業の中で、次の項目についてどの程度できていると思いますか。(単数回答)

■ほぼできている ■どちらかといえどできている ■どちらかといえどできていない ■ほとんどできていない ■授業でやったことがないと思う ■無回答

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



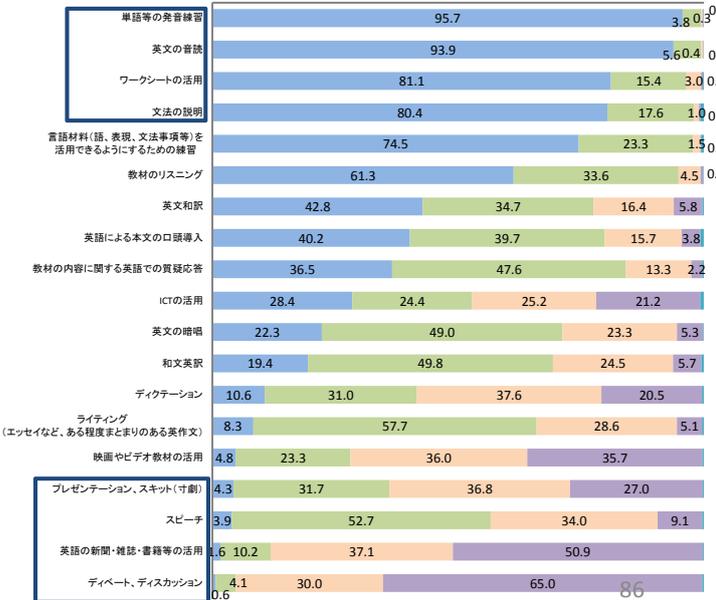
授業における言語活動の指導 (中学校外国語科担当教員回答)

- 「文法の説明」98%や「言語材料を活用できるようにするための練習」97.8%に比べ、それをさらに活用して行う「スピーチ」56.6%、「プレゼンテーションやスキット(寸劇)」36.0%、「ディベート、ディスカッション」34.7%の割合は低い。
- ※上記の%数値は「よく行う」「時々行う」の合計

Q. あなたの英語の授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。(単数回答)

■よく行う ■時々行う ■あまり行わない ■ほとんど行わない ■無回答

0% 20% 40% 60% 80% 100%



86

改善の方向 (小・中・高等学校の連携)

英語教育の在り方に関する有識者会議「今後の英語教育の改善・充実方策について」(抜粋)(H26.9)

現状

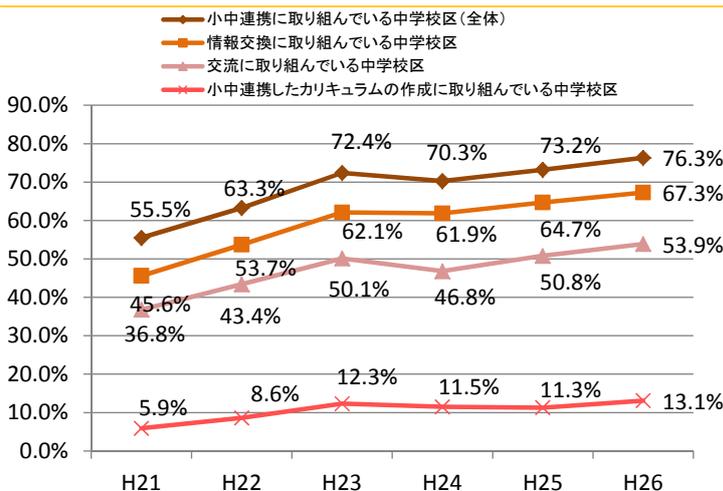
- 各学校種での指導改善は進んでいるものの、**学校間の接続(小中連携、中高連携)が十分とは言えず**、進学後に、それまでの学習内容を発展的に生かすことができていない状況が多い。

改善の方向

- 国として、これまでの取組を検証しつつ、**小・中・高等学校を通して各学校段階の学びを円滑に接続させるとともに、学校種ごとの教育目標を、技能ごとに「英語を使って何ができるようになるか」という視点から一貫した教育目標(4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む)を示す**。これにより、各学校が、具体的な学習到達目標を設定し、英語力に関する達成状況を明確に検証できるようにする。
- 連携の効果が期待される相互乗り入れの授業、連携したカリキュラムづくりの連携、共通理解を図り相互の効果的な指導計画作成や評価などを行う合同研修などを通して、具体的な指導・評価方法等について検討する必要がある。

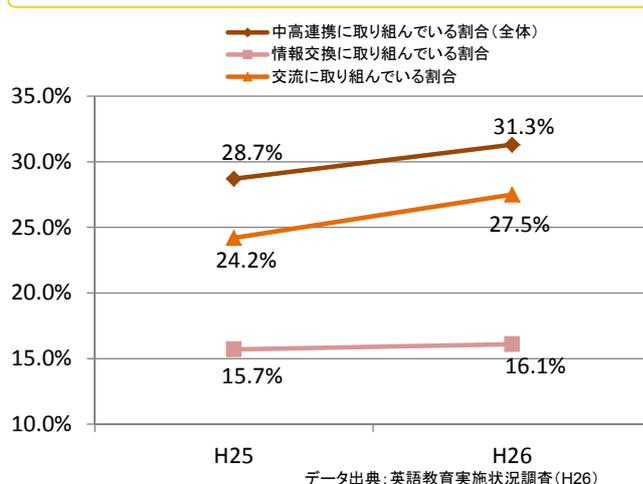
小中連携の状況

- 平成26年度において、小中連携に取り組んでいる中学校区の割合は76.3%、小中連携したカリキュラムの作成に取り組んでいる中学校区の割合は13.1%。



中高連携の状況

- 平成26年度に中高連携に取り組む予定の割合は31.3%で、平成25年度の28.7%から、2.6ポイント上昇している。



小学校外国語における指導者の役割(イメージ)

英語教育の在り方に関する有識者会議(26年9月)[参考資料]

専科指導者の役割 ①

(学級担任を持ちながら高学年の外国語授業を実施)

- ①年間指導計画立案(目標、指導内容、活動、評価方法) 他教科等と連携した授業実施
- ②教材準備
- ③児童に自ら発話するよう働きかけ 児童のつまずきに気づき、適切なサポート
- ④様々な国の習慣や文化等への理解を促す
- ⑤児童のコミュニケーションを図ろうとする関心・意欲・態度や国際理解の面を評価

専科指導者の役割 ②

(小学校教員で担任を持たず高学年の外国語授業を実施)

- ①年間指導計画立案(目標、指導内容、活動、評価方法)
- ②教材準備
- ③児童に自ら発話するよう働きかけ
- ④様々な国の習慣や文化等への理解を促す
- ⑤児童のコミュニケーションを図ろうとする関心・意欲・態度や国際理解の面を評価

※小学校高学年:教科型

【現状】小学校における英語の専科教員:5年:5.8%,6年6.2%
小学校教員における中学校の英語免許状保有者:4.1%(約1.6万人)
※他の教科と持ち合いで時間を確保・調整

①の例(岐阜県高山市)

・中学校英語免許を持つ教員が学級担任を持ちながら5、6年生の3学級を担当。理科、社会、音楽などは他の専科教員が持ち合いで調整。

②の例(島根県江津市)

・中学校英語免許を持つ教員が担任を持たず、5、6年生の9学級の外国語活動と音楽を担当。

学級担任の役割

- ・児童のつまずきに気づき、適切なサポート
- ・年間指導計画立案支援、及び他の教科等と連携した授業実施

連携

学級担任の役割

- ①年間指導計画立案 (目標、指導内容、活動、評価方法)
- ②ALT等と協力して教材等を準備、授業を進行
- ③児童のつまずきに気づき児童が自信を持って発話できるよう、きめ細かくサポート
- ④児童のコミュニケーションを図ろうとする関心・意欲・態度や国際理解の面を評価

外国語指導助手(ALT) または 英語に堪能な地域人材)の役割

- ①教員と協力して教材を準備
- ②様々な国の習慣や文化等を伝える
- ③ネイティブとして話し聞かせる
- ④児童に自ら英語で発言するよう働きかけ
- ⑤評価への協力 等

※現状として、⑤は全てのALT等が対応可能ではない。

チーム・ティーチング

向上し役割を拡大
英語指導力を

※小学校中学年:活動型

現状:ALT等の活用時数 56%

12000人(うちJET:約4000人) 87

(参考資料)

参考資料目次 (案)

・法令上定められている教育の目的・目標について・・・	91	・学習意欲と学習プロセスとの関係・・・・・・・・・・	108
・第2期教育振興基本計画概要・・・・・・・・・・	92	・「知の構造」について・・・・・・・・・・	110
・これまで提言された様々な資質・能力について (イメージ案)・・・・・・・・・・	93	・学習へのアプローチについて・・・・・・・・・・	111
・OECDとの取組について・・・・・・・・・・	94	・「特定の課題に関する調査(論理的な思考)」調査 (国立教育政策研究所)の枠組み・・・・・・・・・・	112
・育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と 評価の在り方に関する検討会－論点整理－ 【主なポイント】・・・・・・・・・・	96	・教育目標の分類学(ブルーム・タキソノミー)・・・	113
・持続可能な開発のための教育(ESD)について・・・	98	・学校で育てる能力の階層性(質的レベル) を捉える枠組み・・・・・・・・・・	114
・国際バカロレア(IB)の学習者像・・・・・・・・・・	99	・現行学習指導要領等における学習活動の例・・・	116
・OECDキーコンピテンシーについて・・・・・・・・・・	100	・(参考)総合的な学習の時間における探究的な学習 における児童・生徒の学習の姿・・・・・・・・・・	120
・PISA2015及びPISA2018で測定する力・・・	101	・多様な評価方法の例(詳細)・・・・・・・・・・	121
・諸外国の教育改革における資質・能力目標・・・	102	・「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の各教科 において、大学教育を受けるために必要な能力として どのような力を評価すべきか?(検討中の素案)・・・	122
・国立教育政策研究所が整理した「21世紀型能力」 のイメージ・・・・・・・・・・	103	・高等学校基礎学力テスト(仮称)の主な論点整理 (検討・たたき台)・・・・・・・・・・	124
・アクティブ・ラーニングの一般的特徴として 挙げられる点・・・・・・・・・・	104	・大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の主な論点整理 (検討・たたき台)・・・・・・・・・・	126
・アクティブ・ラーニングの失敗事例調査から・・・	105		
・アクティブ・ラーニングに係る教育現場支援 プロジェクトの例・・・・・・・・・・	106		
・学習プロセスのイメージ(例)・・・・・・・・・・	107		

法令上定められている教育の目的・目標について

教育の目的(基本法1)

教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

教育の目標(基本法2)

- 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。
- 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養う。
 - 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養う。
 - 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う。
 - 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養う。
 - 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う。

幼児教育

幼児教育の目的(学教法22)

義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する。

- ### 幼児教育の目標(学教法23)
- 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図る
 - 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養う
 - 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養う
 - 日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養う
 - 音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養う

義務教育

義務教育の目的(基本法52)

各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養う

- ### 義務教育の目標(学教法21)
- 自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う
 - 生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養う
 - 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う
 - 家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養う
 - 読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養う
 - 生活に必要な数量的な関係を正しく理解し、処理する基礎的な能力を養う
 - 生活にかかわる自然現象について、観察及び実験を通じて、科学的に理解し、処理する基礎的な能力を養う
 - 健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養うとともに、運動を通じて体力を養い、心身の調和的発達を図る
 - 生活を明るく豊かにする音楽、美術、文芸その他の芸術について基礎的な理解と技能を養う
 - 職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養う

小学校教育の目的(学教法29)

心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施す

中学校教育の目的(学教法45)

小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施す

中等教育学校の目的(学教法63)

小学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、義務教育として行われる普通教育並びに高度な普通教育及び専門教育を一貫して施す

- ### 中等教育学校の目標(学教法64)
- 豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養う
 - 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させる
 - 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養う

学力の3要素(学教法30②)：小学校、49：中学校、62：高等学校、70：中等教育学校

前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

特別支援学校の目的(学教法72)

視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由者又は病弱者に対して、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校に準ずる教育を施すとともに、障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授ける

後期中等教育(高校など)

高校の目的(学教法50)

中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施す

- ### 高校の目標(学教法51)
- 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養う
 - 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させる
 - 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養う

高等教育(大学など)

大学の目的(学教法83)

学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させる

大学院の目的(学教法99)

学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与する

高等専門学校の目的(学教法115)

深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成する

専修学校の目的(学教法124)

職業若しくは実生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図る

第2期教育振興基本計画 第1部 総論 概要 ~我が国の危機回避に向けた4つの基本的方向性~

※教育振興基本計画：教育基本法第17条第1項に基づき政府が策定する。教育の振興に関する総合計画(第2期計画期間：平成25~29年度)

教育行政の4つの基本的方向性

⇒ 改正教育基本法の理念を踏まえ教育再生を実現するため、生涯の各段階を貫く方向性を設定し、成果目標・指標、具体的方策を体系的に整理(次頁参照)。

- 1. 社会を生き抜く力の養成**
~多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力~
→ 「教育成果の保証」に向けた条件整備
- 2. 未来への飛躍を実現する人材の養成**
~変化や新たな価値を主導・創造し、社会の各分野を牽引していく人材~
→ 創造性やチャレンジ精神、リーダーシップ、日本人としてのアイデンティティ、語学・コミュニケーション能力などの育成に向けた多様な体験・切磋琢磨の機会の増大、優れた能力と多様な個性を伸ばす環境の醸成
- 3. 学びのセーフティネットの構築**
~誰もがアクセスできる多様な学習機会を~
→ 教育費負担軽減など学習機会の確保や安全安心な教育研究環境の確保
- 4. 絆づくりと活力あるコミュニティの形成**
~社会が人を育み、人が社会をつくる好循環~
→ 学習を通じて多様な人が集い協働するための体制・ネットワークの形成など社会全体の教育力の強化や、人々が主体的に社会参画し相互に支え合うための環境整備

(共通理念)

- ◆ 教育における多様性の尊重
- ◆ 社会全体の「横」の連携・協働
- ◆ ライフステージに応じた「縦」の接続
- ◆ 現場の活性化に向けた国・地方の連携・協働

(教育投資の在り方)

- ◆ 現下の様々な教育課題を踏まえ、今後の教育投資の方向性としては、以下の3点を中心に充実を図る。
 - ・ 協働型・双方向型学習など質の高い教育を可能とする環境の構築
 - ・ 家計における教育費負担の軽減
 - ・ 安全・安心な教育研究環境の構築(学校施設の耐震化など)
- ◆ 教育の再生は最優先の政策課題の一つであり、欧米主要国を上回る質の高い教育の実現が求められている。このため、OECD諸国など諸外国における公財政支出など教育投資の状況を参考とし、第2期計画期間内においては、第2部において掲げる成果目標の達成や基本施策の実施に必要な予算について財源を措置し、真に必要な教育投資を確保していくことが必要。

(危機回避シナリオ)

- 個々人の自己実現、社会の「担い手」の増加、格差の改善(若者・女性・高齢者・障害者などを含め、生涯現役 全員参加に向けて個人の能力を最大限伸長)
 - 社会全体の生産性向上(グローバル化に対応したイノベーションなど)
 - 一人一人の絆の確保(社会関係資本の形成)
- ⇒ 一人一人が誇りと自信を取り戻し、社会の幅広い人々が実感できる成長を実現

我が国を取り巻く危機的状況

相互に関連

東日本大震災により一層の顕在化・加速

- 少子化・高齢化の進展
 - ・ 生産年齢人口の減少(2060年には、我が国の人口は2010年比約3割減の約9千万人まで減少するうち4割が65歳以上の高齢者。)
 - ・ 経済規模縮小、税収減、社会保障費の拡大
 - 社会全体の活力低下
- グローバル化の進展
 - ・ 人・モノ・金・情報等の流動化
 - ・ 「知識基盤社会」の本格的到来
 - ・ 新興国の台頭等による国際競争の激化
 - ・ 生産拠点を海外移転による産業空洞化
 - 我が国の国際的な存在感の低下
- 雇用環境の変容
 - ・ 終身雇用・年功序列等の変容
 - ・ 企業内教育による人材育成機能の低下
 - 失業率、非正規雇用の増加
- 地域社会、家族の変容
 - ・ 地域社会等のつながりや支え合いによるセーフティネット機能の低下
 - ・ 価値観・ライフスタイルの多様化
 - 個々人の孤立化、規範意識の低下
- 格差の再生産・固定化
 - ・ 経済格差の進行→教育格差→教育格差の再生産・固定化(同一世代内、世代間)
 - 一人一人の意欲減退、社会的不安定化
- 地球規模の課題への対応
 - ・ 環境問題、食料・エネルギー問題、民族・宗教紛争など様々な地球規模の課題に直面しており、かつてのような物質的豊かさのみの追求という視点から脱却し、持続可能な社会の構築に向けて取り組んでいくことが必要。

【震災の教訓(危機打開に向けた手掛かり)】

- 諦めず、状況を的確に捉え自ら考え行動する力
- イノベーションなど未来志向の復興、社会づくり
- 安心して必要な力を身に付けられる環境
- 人々や地域間、各国間に存在するつながり、人と自然との共生の重要性

【第1期計画の評価】

- 第1期計画で掲げた「10年を邁進して目指すべき教育の姿」の達成はまだまだ遠上。
- ・ 様々な取組を行ったが、学習意欲・学習時間、低学力層の存在、グローバル化等への対応、若者の内向志向、規範意識・社会性等の育成など依然として課題が存在。
- ・ 一方、コミュニティの協働による課題解決や教育格差の問題など新たな視点も浮上。
- 背景には、「個々人の多様な強みを引き出すという視点」「学校段階や学校・社会生活間の接続」「十分なPDCAサイクル」の不足など

今後の社会の方向性

⇒ 「自立」「協働」「創造」の3つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築

創造

自立・協働を通じて更なる新たな価値を創造していくことのできる生涯学習社会

自立

一人一人が多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り開いていくことのできる生涯学習社会

協働

個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、ともに支え合い、高め合い、社会に参画することのできる生涯学習社会

- 【我が国の様々な強み】
- 多様な文化・芸術や優れた感性
 - 勤労性・協調性、思いやりの心
 - 科学技術、「ものづくり」の基盤技術
 - 基礎的な知識技能の平均レベルの高さ
 - 人の絆

子どもから大人まで

発達段階、学校段階の特質に応じた育成

「キー・コンピテンシー」(平成11年～14年OECD「能力の定義と選択」(DeSeCo)プロジェクト)

- ・OECDが主導し、多数の加盟国が参加したプロジェクトで国際的合意。(生徒の学習到達度調査(PISA)(3年ごと)や、国際成人力調査(PIAAC)(5年ごと)で、これらの能力の一部に関する各国の状況を測定)
- ・グローバル化と近代化により、多様化し、相互につながった世界において、人生の成功と正常に機能する社会のために必要な能力。

①～③の核となる「考える力」

- ①言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力:「言語、シンボル、テキストを活用する能力」「知識や情報を活用する能力」「テクノロジーを活用する能力」
- ②多様な集団における人間関係形成能力:「他人と円滑に人間関係を構築する能力」「協調する能力」「利害の対立を御し、解決する能力」
- ③自律的に行動する能力:「大局的に行動する能力」「人生設計や個人の計画を作り実行する能力」「権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力」

「総合的な「知」」(平成20年中教審答申(新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～(答申))

- ・「知識基盤社会」の時代において、様々な変化に対応していくために必要な力。狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、他者との関係を築く力、豊かな人間性など。

幼児教育、義務教育、高校教育

大学

大学院

「生きる力」

(平成8年中教審答申(21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)))(別紙参考1・2)

- ・国際化や情報化の進展など、変化が激しい時代において、いかに社会が変化しようとする必要能力。「知・徳・体のバランスの取れた力」と定義。

※学校教育法において、①基礎的な知識・技能、②これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度と具体化。

①確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

②豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など

③健康・体力

たくましく生きるための健康や体力

「課題探求能力」

(平成10年大学審議会答申(21世紀の大学像と今後の改革方策について-競争的環境の中で個性が輝く大学-(答申))

- ・主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力

「学力力」(平成20年中教審答申(学士課程教育の構築に向けて(答申)))(別紙参考3)

①知識・理解

専門分野の基礎知識の体系的理解、他文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解

②総合的な学習経験と創造的志向

獲得した知識・技能・態度等を総合的に利用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

③汎用的技能

コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力

④態度・志向性

自己管理力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

「大学院に求められる人材養成機能」

(平成17年中教審答申(新時代の大学院教育-国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて-(答申))

①創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等

②高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人

③知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材

社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行のための「基礎的・汎用的能力」

(平成23年中教審答申(今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)))(別紙参考4)

- ・「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」。

「イノベーション創出に向けて必要な資質」(平成19年閣議決定長期戦略指針「イノベーション25」)

- ・「困難に立ち向かいそれを現実のものにしようとするチャレンジ精神」「既存の枠、常識にとらわれない、多くの価値観から生まれる高い志」。

「グローバル人材に必要な資質」(平成23年グローバル人材育成推進会議中間まとめ)

- ・「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」及び「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者)の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー」など。

【検討の視点の例】
・これらの資質能力は、すべての人に求められるのか、特定の人に求められるものか。
また、学校教育のみで培うべきものか。もしくは、地域社会の生活との関わりにおいても培われるものか。
・どのような政策が必要か。

(参考)上記のほか、これまで提言されてきた主な資質

社会参画の観点	人間力(平成15年人間力戦略研究会(内閣府))(別紙参考5) ⇒ 「知的・能力的要素」「社会・対人関係力的要素」「自己制御的要素」の3つの要素で構成。
産業人材の観点	社会人基礎力(平成18年社会人基礎力に関する研究会(経済産業省))(別紙参考6) ⇒ ①前に踏み出す力(アクション)【主体性、働きかけ力、実行力】 ②考え抜く力(シンキング)【課題発見力、計画力、想像力】 ③チームで働く力(チームワーク)【発進力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力】

日本・OECD共同イニシアチブ・プロジェクト

- グローバル化・少子高齢化等の時代の変化を乗り越え、新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を子供たちに育むための新たな教育モデルを日本・OECD共同で開発し、我が国のみならず、課題を共有する諸外国と共有し、各国における学校教育の革新等に寄与することを目的として実施するもの。
- 本プロジェクトは、日本・OECD間のバイラテラルな枠組みのもとで、以下の具体的な事業を通じて実施する。

政策対話

新しい時代にふさわしいカリキュラムや授業の在り方、アクティブ・ラーニングをはじめとした学習・指導方法、学力評価の在り方等に関して、文部科学省・OECD双方のハイレベルスタッフにより意見交換を行う政策対話を実施し、本プロジェクトに包括的な方向付けを与えることとする。

共同研究

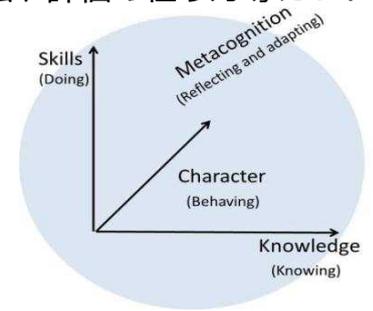
日本側は東京学芸大学を主な主体として、日本・OECD共同で、教育方法や、OECDが有する様々なノウハウ・データの調査研究等を通じて、学校現場の教育革新に資する成果の創出を目指す。

地域創生イノベーションスクール2030

OECD東北スクール事業の成果の上に、課題解決や国際性涵養等に資する学習内容・方法の学校現場への普及を実践的に検証する事業として、文部科学省・OECD・福島大学等が共同で実施することを目指す。

Education 2030プロジェクトのマルチでの議論の目的・枠組み

- 2030年に向けて育成していかなければならないキー・コンピテンシーについて、「Knowledge, Skills, Character」等の視点から改訂を行い、各国の政策立案をサポートするために行うもの。日本・OECD共同イニシアチブ・プロジェクトの成果を元しつつ、当面2015年から2018年の4年間での実施が予定しており、2019年以降については、キー・コンピテンシーに係る教授法や評価の在り方等について、引き続き検討がなされる予定。
- Education 2030の目的は、以下の3つ。
 - A. 教育に関するより長期的な議論を促進すること
 - B. 将来、幸福な生活を送りながら社会にも貢献できる人材に求められる「Knowledge, Skills, Character」等を特定し、再定義すること
 - C. 長期的な政策に必要な共通のConceptual Frameworkを作ること
- 現在提案されている分析のframework は以下の5つの側面に焦点を当てようとしている。
 1. (社会経済分析) 将来の予測が困難な2030年の時代に適応していくために子供達に求められるKnowledge等はどうなものか
 2. (教育政策分析) 現在の政策やカリキュラムによって形成されているKnowledge等と、将来必要なそれとのギャップはどうなものか
 3. (制度分析) 保護者や地域コミュニティ、自治体、大学等との連携のような学校外での学習や教育実践を組織化していくためのインセンティブ、ディスインセンティブにはどのようなものがあるか
 4. (学習・教授分析) 新たに必要となる学習、指導の方法とはどのようなものか
 5. (過程分析) 良い教育の実現のために、1～4それぞれがどのように関連し合っているか
- ※ このプロジェクトは、①非公式ワーキンググループ、②OECD事務局、③各国の専門家・研究者、④教員団体等の関係団体、の参画を通じて実施することを予定。
OECDとしては、現在、各国に対して当プロジェクトへの参加を呼びかけているところ。



95

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 — 論点整理 — 【主なポイント】 (平成26年3月31日取りまとめ)

- 本検討会は、次期学習指導要領に向けての基礎的な資料を得ることを目的に、教育課程に関する学識経験者を集めて開催したもの。
※平成24年12月～26年3月17日まで13回開催
- 今後、各論点について更に検討を深めた上で、次期学習指導要領の枠組みづくりに向けた議論に生かしたい。

主な提言事項

- 今後、学習指導要領の構造を、
 - ① 「児童生徒に育成すべき資質・能力」を明確化した上で、
 - ② そのために各教科等でどのような教育目標・内容を扱うべきか、
 - ③ また、資質・能力の育成の状況を適切に把握し、指導の改善を図るための学習評価はどうあるべきか、といった視点から見直すことが必要。

← 従来の学習指導要領は、児童生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるかという視点よりも、各教科等においてどのような内容を教えるかを中心とした構造。そのために、学習を通じて「何ができるようになったか」よりも、「知識として何を知ったか」が重視されがちとなり、また、各教科等を横断する汎用的な能力の育成を意識した取組も不十分と指摘されている。

← 世界的潮流として、OECDの「キー・コンピテンシー」をはじめ、育成すべき資質・能力を明確化した上で、その育成に必要な教育の在り方を考える方向。
(アメリカを中心とした「21世紀型スキル」、英国の「キー・スキルと思考スキル」、オーストラリアの「汎用的能力」など。)

日本でも比較的早い時期から「生きる力」の理念を提唱しており、その考え方はOECDのキー・コンピテンシーとも重なるものであるが、「生きる力」を構成する具体的な資質・能力の具体化や、それらと各教科等の教育目標・内容の関係についての分析がこれまで十分でなく、学習指導要領全体としては教育内容中心のものとなっている。

← より効果的な教育課程への改善を目指すためには、学習指導要領の構造を、育成すべき資質・能力を起点として改めて見直し、改善を図ることが必要。

- 本検討会では、こうした前提の下、諸外国の資質・能力論の分析や、国立教育政策研究所で検討されている「21世紀型能力」の枠組み試案などを参考としながら、今後の学習指導要領の構造として重視すべきポイントについて議論。96

○これまでの検討の主な成果は次のとおり。

①育成すべき資質・能力について

- ・ 今後育成が求められる資質・能力の枠組みについて、諸外国の動向や国立教育政策研究所の「21世紀型能力」も踏まえつつ更に検討が必要。
- ・ その際、自立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力を育成するため、例えば、「主体性・自律性に関わる力」「対人関係能力」「課題解決力」「学びに向かう力」「情報活用能力」「グローバル化に対応する力」「持続可能な社会づくりに関わる実践力」などを重視することが必要と考えられる。
- ・ また、我が国の児童生徒の実態を踏まえると、受け身でなく、主体性を持って学ぶ力を育てることが重要であり、リーダーシップ、企画力・創造力、意欲や志なども重視すべき。人としての思いやりや優しさ、感性などの人間性も重要。

②育成すべき資質・能力に対応した教育目標・内容について

- ・ 現在の学習指導要領に定められている各教科等の教育目標・内容を以下の三つの視点で分析した上で、学習指導要領の構造の中で適切に位置付け直したり、その意義を明確に示したりすることについて検討すべき。ア)～ウ)については、相互のつながりを意識しつつ扱うことが重要。
- ・ ア)教科等を横断する汎用的なスキル(コンピテンシー)等に関わるもの
 - ①汎用的なスキル等としては、例えば、問題解決、論理的思考、コミュニケーション、意欲など
 - ②メタ認知(自己調整や内省、批判的思考等を可能にするもの)
- ・ イ)教科等の本質に関わるもの(教科等ならではの見方・考え方など)
 - 例：「エネルギーとは何か。電気とは何か。どのような性質を持っているのか」のような教科等の本質に関わる問いに答えるためのものの見方・考え方、処理や表現の方法など
- ・ ウ)教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの
 - 例：「乾電池」についての知識、「検流計」の使い方

③育成すべき資質・能力に対応した学習評価について

- ・ 評価の基準を、「何を知っているか」にとどまらず、「何ができるか」へと改善することが必要。
- ・ このためには、現行の学習評価の取組に加え、パフォーマンス評価を重視する必要がある、そのための具体的な方法論について更に検討が必要。

④その他

- ・ 学習指導要領に指導方法についてどこまで盛り込むべきか検討すべき。
- ・ 各学校において、育成すべき資質・能力を中心とした効果的なカリキュラムが編成・実施されるよう、学校の教育目標の見直しや、学校全体のカリキュラム・マネジメントを促進するための支援策について検討すべき。

持続可能な開発のための教育 (ESD) について

1. 「ESD(持続可能な開発のための教育)」とは？

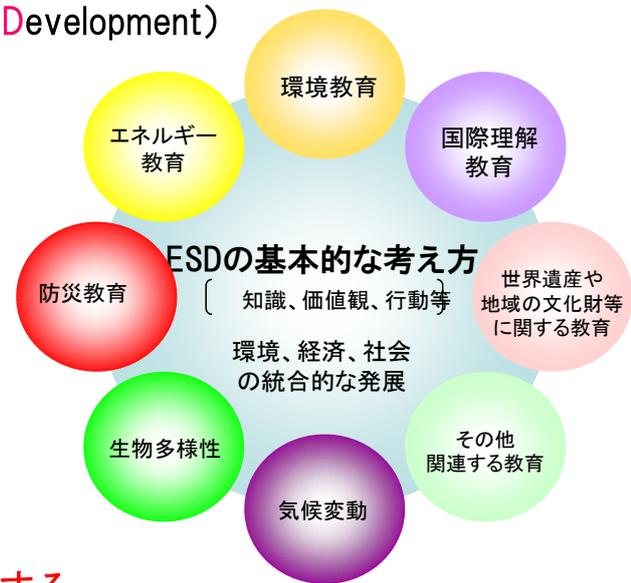
ESD=Education for Sustainable Developmentの略。

持続可能な社会の担い手を育むため、地球規模の課題を自分のこととして捉え、その解決に向けて自分で考え行動を起こす力を身に付けるための教育。

2. 「国連ESDの10年」(UNDESD)について

(United Nations Decade of Education for Sustainable Development)

- 2002年 ヨハネスブルクサミットで我が国が提案
- 2002年 国連決議(第57回総会)
 - ・ 2005～2014年の10年
 - ・ ユネスコを主導機関に指名
- 2005年 DESD国際実施計画をユネスコにて策定
- 2009年 ESD世界会議(ボン)
 - ・ ボン宣言の採択



- 2014年 持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議 (愛知県・名古屋市/岡山市)

国際バカロレア（IB）の学習者像

（出典）国際バカロレア機構HP「IB Learner Profile」より文部科学省作成（2014/11/20アクセス）

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界の構築に貢献する人間を育成します。IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い知識を探究します。地域社会やグローバル社会の重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のもの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。⁹⁹

OECDキーコンピテンシーについて

OECDにおいて、単なる知識や技能ではなく、人が特定の状況の中で技能や態度を含む心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力とされる概念。

【キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー】

1. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

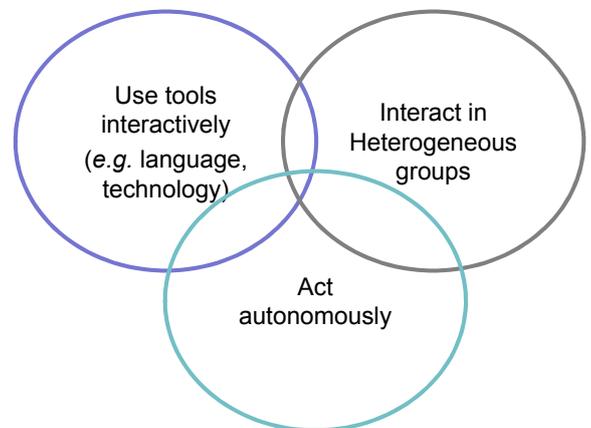
- A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力
- B 知識や情報を相互作用的に活用する能力
- C テクノロジーを相互作用的に活用する能力

2. 多様な社会グループにおける人間関係形成能力

- A 他人と円滑に人間関係を構築する能力
- B 協調する能力
- C 利害の対立を御し、解決する能力

3. 自律的に行動する能力

- A 大局的に行動する能力
- B 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
- C 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力



○ この3つのキー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性。

深く考えることには、目の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはめることができる力だけでなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え、行動する力が含まれる。

PISA 2015及びPISA 2018で測定する力

3分野（数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシー）に加え、以下の能力についても調査。

1. PISA 2015

協同問題解決能力

Collaborative problem solving competency is the capacity of an individual to effectively engage in a process whereby two or more agents attempt to solve a problem by sharing the understanding and effort required to come to a solution and pooling their knowledge, skills and efforts to reach that solution.

仮訳：協同問題解決能力とは、2人以上の行為者が、問題を解決するために必要な理解や努力を共有し、その解決に至る知識・技術・努力をプールすることによって、問題を解決するプロセスに効果的に関わろうとする個人の能力。

含まれる3つのコンピテンシー

1. *Establishing and maintaining shared understanding;*
理解の共有を確立し、維持する
2. *Taking appropriate action to solve the problem;*
問題を解決するために適切な行動を起こす
3. *Establishing and maintaining team organization.*
チームの組織を設置し、維持する

2. PISA 2018

グローバルコンピテンシ

（詳細は現在検討中）

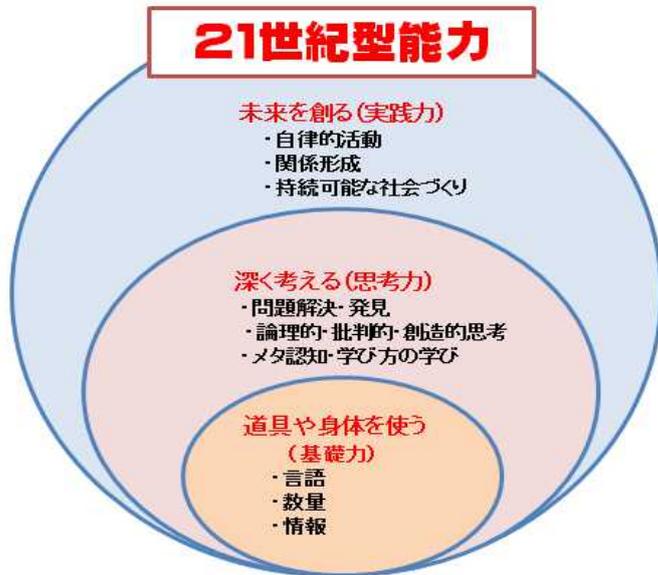
（出典：PISA 2015 Draft Collaboration Problem Solving Framework, OECD） 101

諸外国の教育改革における資質・能力目標

DeSeCo	EU	イギリス	オーストラリア	ニュージーランド	(アメリカほか)		
キーコンピテンシー	キーコンピテンシー	キースキル と思考スキル	汎用的能力	キー コンピテンシー	21世紀スキル		
相互作用的 道具活用力	言語、記号の 活用	第1言語 外国語	コミュニケーション	リテラシー	言語・記号・テキスト を使用する能力	基礎的 リテラシー	
	知識や情報の 活用	数学と科学技術の コンピテンシ	数字の応用	ニューメラシー			情報リテラシー ICTリテラシー
	技術の活用	デジタル・ コンピテンシ	情報テク ノロジー	ICT技術			
反省性(考える力) (協働する力) (問題解決力)	学び方の 学習	思考スキル (問題解決) (協働する)	批判的・ 創造的思考力	思考力	創造とイノベーション 批判的思考と 問題解決 学び方の学習 コミュニケーション 協働	認知スキル	
自律的 活動力	大きな展望	進取の精神 と起業精神		倫理的行動	自己管理力	キャリアと生活	
	人生設計と個人 的プロジェクト 権利・利害・限界 や要求の表明		問題解決				
異質な集団 での交流力	人間関係力	社会的・市民的コン ピテンシー	協働する	個人的・ 社会的な能力	他者との関わり	個人的・社会的責任 シティズンシップ	
	協働する力	文化的気づきと表現		異文化間理解	参加と貢献		
	問題解決力						

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と
評価の在り方に関する検討会(第6回)
平成25年6月27日 配付資料
(国立教育政策研究所)

①思考力を中核とし、それを支える ②基礎力と、使い方を方向づける ③実践力の三層構造



求められる力	具体像（イメージ）
未来を創る（実践力）	生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者と関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、健やかで豊かな未来を創る力
深く考える（思考力）	一人一人が自分の考えを持って他者対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや知識を創り出す力、さらに次の問いを見つけ、学び続ける力
道具や身体を使う（基礎力）	言語や数量、情報などの記号や自らの身体を用いて、世界を理解し、表現する力

（国立教育政策研究所，2013，p.26 一部編集） 103

アクティブ・ラーニングの一般的特徴として挙げられる点

- (a) 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
- (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- (c) 学生は高次の思考（分析、総合、評価）に関わっていること
- (d) 学生は活動（例：読む、議論する、書く）に関与していること
- (e) 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること

(f) 認知プロセスの外化※を伴うこと

※問題解決のために知識を使ったり、人に話したり書いたり発表したりすること

（参考）指導における「双子の過ち」

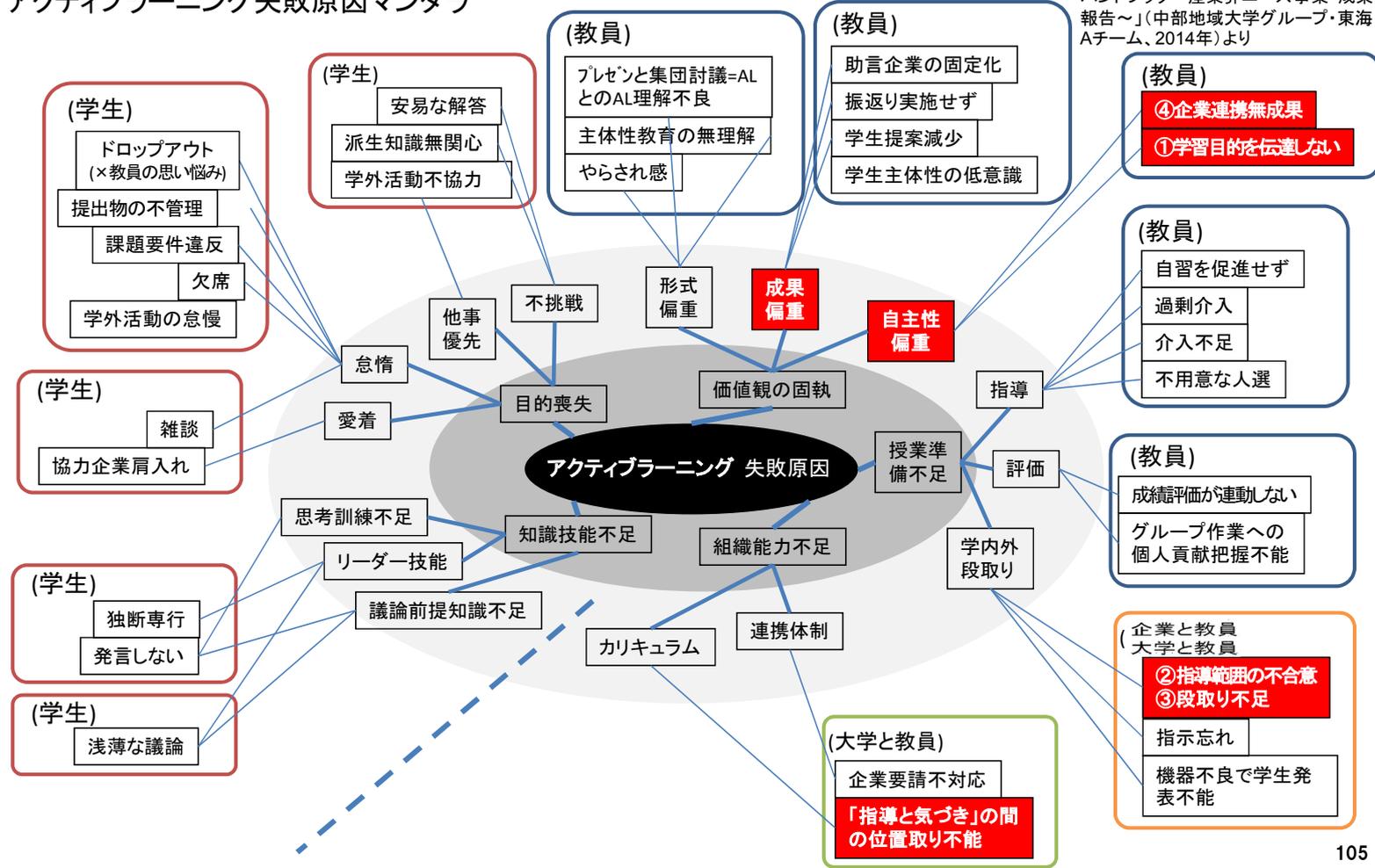
「網羅に焦点を合わせた指導」

「活動に焦点を合わせた指導」

アクティブ・ラーニングの失敗事例調査から

(出典)「アクティブラーニング失敗事例ハンドブック～産業界ニーズ事業・成果報告～」(中部地域大学グループ・東海Aチーム、2014年)より

アクティブラーニング失敗原因マンダラ



(参考) アクティブ・ラーニングに係る教育現場支援プロジェクトの例

アクティブラーニング推進のための高大連携プロジェクト：
 「高校のアクティブラーニング実践に関する全国調査」と
 「アクティブラーニング実践の「再」発見を促すネットワークの構築」

(中原淳・東京大学 大学総合教育研究センター准教授提供資料)



背景	「能動的学習(アクティブ・ラーニング)」への注目	
目的	高校生の将来のキャリアを見据えたアクティブラーニング型授業の推進	
日本教育研究イノベーションセンター(JOEN) 東京大学 大学総合教育研究センター 教育課程方法開発部門	アクティブラーニング実施に関する量的調査 ・全国の高校を対象 ・各カテゴリー別の実態と課題の分析 ・年に一度の経年調査 アクティブラーニング先進事例に関する調査 ・実践観察およびヒアリング調査 ・従来の実践の中からの再発見・再発掘 ・教師一人ひとりの工夫の可視化・言語化 高大をつなぐオンラインコミュニティ構築 ・アクティブラーニングに関わる教育者をつなげる ・オンラインで上記2つの調査結果を無料公開 ・各現場でのアクティブラーニング推進を側面支援	オンラインコミュニティの構築
学術	主体的・協同的な学びを導く教育実践に関する事例の体系化	現場
		・マクロな情報や最先端事例について発信しつつも、自らの現場で「一歩」を踏み出すためのヒントを提示 ・教師がアクティブラーニングについて語り合い始めるための情報と「場」の提供

動機付け ⇒ 方向付け ⇒ 内化 ⇒ 外化 ⇒ 批評 ⇒ 統制

動機付け

主題に対する意識的・実質的な興味を喚起すること。
学習者が、これまでの知識や経験では目の前の問題に対処できないという事態に直面すること。

方向付け

問題の解決を目指して学習活動を始めること。
問題の解決に必要な知識の原理と構造を説明する予備的な仮説（モデル）を形成すること。

内化

問題の解決に必要な知識を習得すること。
新しい知識の助けを借りて、予備的なモデルを豊かにしていくこと。

外化

習得した知識を実際に適用して問題の解決を試みること。
問題を解決し、現実の変化に影響を及ぼし革新を生じさせる際に、モデルをツールとして応用すること。

批評

問題の解決に知識を適用する中で、知識の限界を見つけ再構築すること。自分の獲得した説明モデルの妥当性と有効性を批判的に評価すること。

統制

一連のプロセスを振り返り、必要に応じて修正を行いながら、次の学習プロセスへと向かうこと。

エンゲストローム（ヘルシンキ大学教授）著『変革を生む研修のデザイン』（松下佳代・三輪建二 監訳）を元に作成 107

学習意欲と学習プロセスとの関係

エンゲージメントと非エンゲージメント

(Skinner, Kindermann, Connel, & Wellborn, 2009を一部改変)

	エンゲージメント: 意欲的な姿	非エンゲージメント: 意欲的でない姿
行動的側面	行為を始める 努力する、尽力する 一生懸命に取り組む 試行する 持続的に取り組む 熱心に取り組む 専念する 熱中する 没頭する	受動的で先延ばしにしようとする あきらめる、身を引く 落ち着きがない 気乗りがしない 課題に焦点が向いておらず不注意 注意散漫 燃え尽き状態 準備不足 不参加
感情的側面	情熱的である 興味を示している 楽しんでいる 満ち足りている 誇りを感じている 生き生きしている 興奮している	退屈している 興味がない 不満げである／怒っている 悲しんでいる 気にしている／不安を感じている 恥じている 自己非難している
認知的側面	目的を自覚している アプローチする 目標実現のために努力する 方略を吟味する 積極的に参加する 集中する、注意を向ける チャレンジを求める 熟達を目指す 注意を払って最後までやり抜く 細部にまで丁寧で几帳面である	無目的である 無力な状態である あきらめている 気の進まない様子である 反抗的である 頭が働いていない 回避的である 無関心である 絶望している 精神的圧迫を感じている

動機づけ、学習のプロセスと成果の関係

(Entwistle, 1988を中心としてBiggs,1978, Entwistle, 1981より作成)

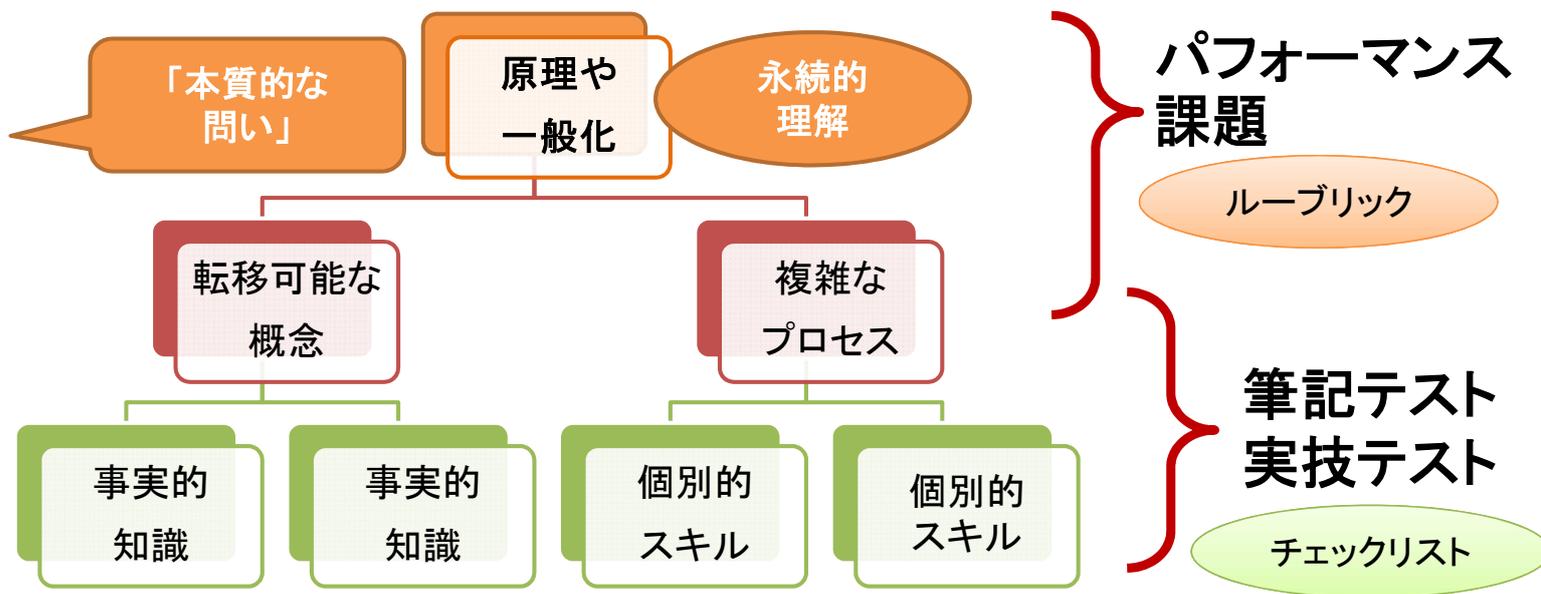


鹿毛 雅治 (慶應義塾大学教職課程センター教授) 著 『学習意欲の理論-動機づけの教育心理学-』 (金子書房、2013年) 第4章 (p.209) より引用

109

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会(第8回)
平成25年8月30日配付資料
(西岡加名恵委員)

○「知の構造」



(McTighe, J. & Wiggins, G., *Understanding by Design: Professional Development Workbook*, ASCD, 2004, p.65の図や、Erickson, H.L., *Stirring the Head, Heart, and Soul*, 3rd Ed. Corwin Press, 2008, p.31の図をもとに西岡作成。G・ウィギンズ/J・マクタイ、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』日本標準、2012年も参照)

110

学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴

深いアプローチ

- これまで持っていた知識や経験に考えを関連づけること
- パターンや重要な原理を探すこと
- 根拠を持ち、それを結論に関連づけること
- 論理や議論を注意深く、批判的に検討すること
- 学びながら成長していることを自覚的に理解すること
- コース内容に積極的に関心を持つこと

浅いアプローチ

- コースを知識と関連づけないこと
- 事実を棒暗記し、手続きをただ実行すること
- 新しい考えが示されるときに意味を理解するのに困難を覚えること
- コースか課題のいずれにも価値や意味をほとんど求めないこと
- 目的や戦略を反映させずに勉強すること
- 過度のプレッシャーを感じ、学習について心配すること

活動の「動詞」から見る学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴

学習活動	深いアプローチ	浅いアプローチ
<ul style="list-style-type: none"> ●振り返る ●離れた問題に適用する ●仮説を立てる ●原理と関連づける ●身近な問題に適用する ●説明する ●論じる ●関連づける ●中心となる考えを理解する ●記述する ●言い換える ●文章を理解する ●認める・名前をあげる ●記憶する 		

Entwistle,McCune,&Walker(2010),table5.2(p.109)の一部を翻訳

Biggs&Tang(2011),Figure2.1(p.29)の一部を翻訳・作成

『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』第1章（溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）執筆）より 111

「特定の課題に関する調査（論理的な思考）」調査（国立教育政策研究所）の枠組み

- 我が国のグローバル化の進展を踏まえ、また、学習指導要領においても思考力・判断力・表現力を育むことが重要とされる中で、特定の教科に依らず、高校生の論理的に思考する力の状況を把握・分析するための調査を実施。
- 高等学校第2年次を対象に、論理的に思考する過程での活動を以下の6つに設定し、各活動に係る出題を実施。
- 本調査の設計に当たっては、PISA調査、全国学力・学習状況調査、「法科大学院適性試験（平成23年から法科大学院全国統一適性試験）」等の枠組み等も参考しつつ、活動や内容が整理。

活動	具体的な内容
① 規則、定義、条件等を理解し適用する。	資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し、それを具体的に適用する。
② 必要な情報を抽出し、分析する。	多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析する。
③ 趣旨や主張を把握し、評価する。	資料は、全体としてどのような内容を述べているのかを的確にとらえ、それについて評価する。
④ 事象の関係性について洞察する。	資料に提示されている事象が、論理的にどのような関係にあるのかを見極める。
⑤ 仮説を立て、検証する。	前提となる資料から仮説を立て、他の資料などを用いて仮説を検証する。
⑥ 議論や論証の構造を判断する。	議論や論争の論点・争点について、前提となる暗黙の了解や根拠、また、推論の構造などを明らかにするとともに、その適否を判断する。

※上記①～⑥のそれぞれの活動において、思考の過程や結論を適切に表現することを評価する問題も併せて出題

ブルームの教育目標分類学 【認知的領域】 (Bloom, B.S. 他)

- ① **知識** 情報や概念を想起する
- ② **理解** 伝えられたことがわかり、素材や観念を利用できる
- ③ **応用** 情報や概念を特定の具体的な状況で使う
- ④ **分析** 情報や概念を書く部分に分解し、相互の関係を明らかにする
- ⑤ **総合** 様々な概念を組み合わせて新たなものを形作る
- ⑥ **評価** 素材や方法の価値を目的に照らして判断する

改訂版ブルーム分類学 (Anderson, L.W. 他)

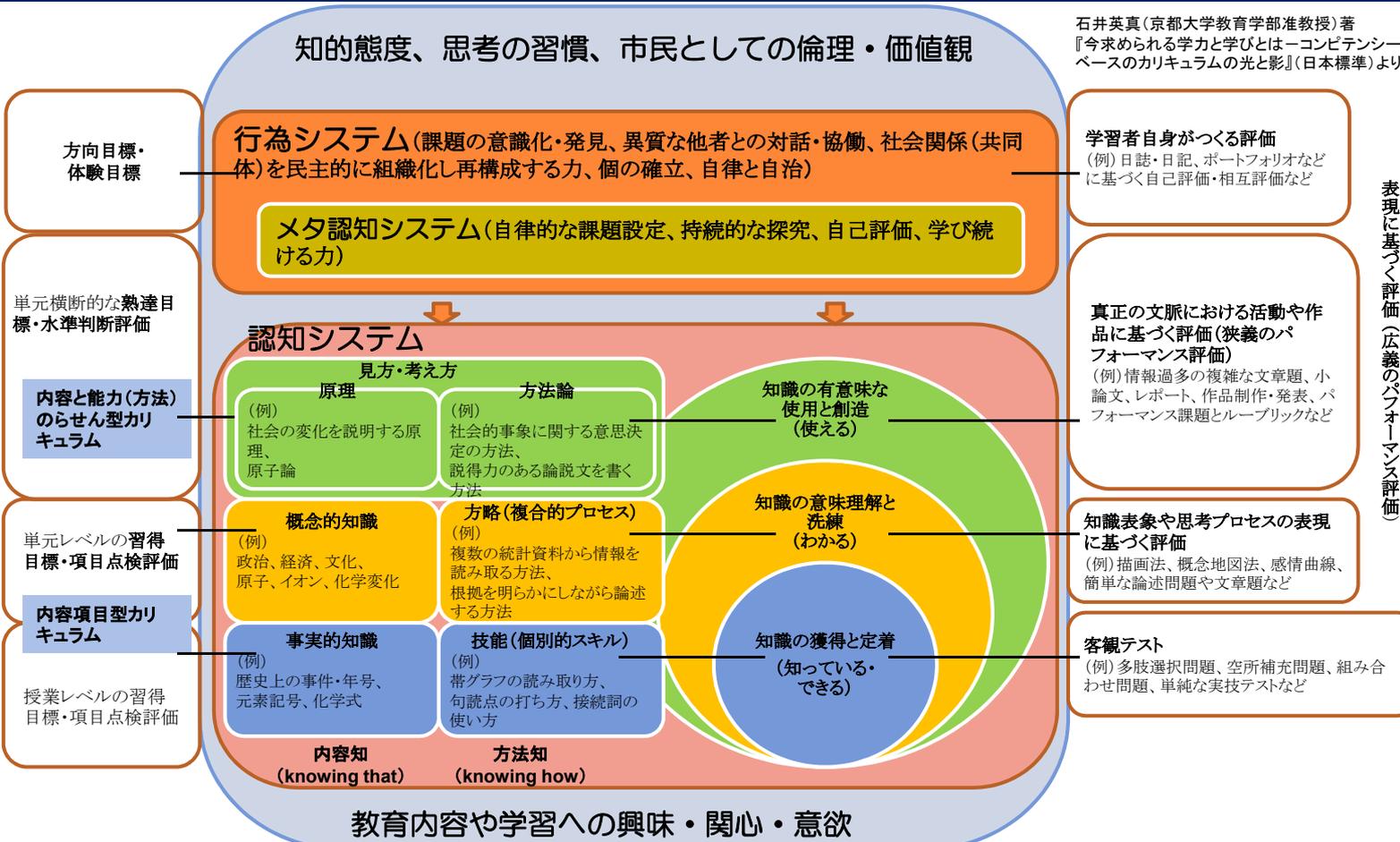
知識次元	認知課程の次元					
	① 記憶	② 理解	③ 応用	④ 分析	⑤ 評価	⑥ 創造
知識次元						
事後的認識						
概念的知識						
遂行的知識						
メタ認知的知識						

梶田 毅一(奈良学園大学長)著『教育評価(第2版補訂版)』(有斐閣), 国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』を元に整理

学校で育てる能力の階層性 (質的レベル) を捉える枠組み

石井英真(京都大学教育学部准教授)著
『今求められる学力と学びとは—コンピテンシーベースのカリキュラムの光と影』(日本標準)より

表現に基づく評価(広義のパフォーマンス評価)



カリキュラムの構造

教科内容(知識)のタイプ分け

めざす学力・学習の質

評価方法の選択

(出典: 学力・学習の質の明確化の枠組みについては、マルザーノら(1992)の「学習の次元(Dimensions of Learning)」の枠組みに若干の修正を加えたものであり、教科内容のタイプ分けについては、ウィギンズら(2012)の「知の構造(Structure of Knowledge)」を再構成したものである)

学校で育てる能力の階層性（質的レベル）を捉える枠組み

石井英真(京都大学教育学部准教授)著『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』(日本標準)より

能力・学習活動の階層レベル(カリキュラムの構造)		資質・能力の要素(目標の柱)			
		知識	スキル		情意(関心・意欲・態度・人格特性)
			認知的スキル	社会的スキル	
教科学習	知識の獲得と定着(知っている・できる)	事実的知識、技能(個別的技能)	記憶と再生、機械的実行と自動化	学び合い、知識の共同構築	達成による自己効力感
	知識の意味理解と洗練(わかる)	概念的知識、方略(複合的プロセス)	解釈、関連付け、構造化、比較・分類、帰納的・演繹的推論		内容の価値に即した内発的動機、教科観、教科への関心・意欲
	知識の有意義な使用と創造(使える)	見方・考え方(原理、方法論)を軸とした領域固有の知識の複合体	知的問題解決、意思決定、仮説的推論を含む証明・実験・調査、知やモノの創発、美的表現(批判的思考や創造的思考が関わる)	プロジェクトベースの対話(コミュニケーション)と協働	活動の社会的レリバンスに即した内発的動機、教科観・教科学習観(知的志向・態度・思考の習慣)
総合学習	自律的な課題設定と探究(メタ認知システム)	思想・見識、世界観と自己像	自律的な課題設定、持続的な探究、情報収集・処理、自己評価		自己の思い・生活意欲(切実性)に根差した内発的動機、志やキャリア意識の形成、
	特別活動	社会関係の自治的組織化と再構成(行為システム)	人と人との関わりや所属する共同体・文化についての意識、共同体の運営や自治に関する方法論	生活問題の解決、イベント・企画の立案、社会問題の解決への関与・参画	人間関係と交わり(チームワーク)、ルールと分業、リーダーシップとマネジメント、争いの処理・合意形成、学びの場や共同体の自主的組織化と再構成

※社会的スキルと情意の欄でレベルの区分が点線になっているのは、知識や認知的スキルに比べてレベルごとの対応関係が緩やかであることを示している。

※網かけ部分は、それぞれの能力・学習活動のレベルにおいて、カリキュラムに明示され中心的に意識されるべき目標の要素。

※認知的・社会的スキルの中身については、学校ごとに具体化するべきであり、学習指導要領等で示す場合も参考資料とすべきだろう。情意領域については、評定の対象というより、形成的評価やカリキュラム評価の対象とすべきであろう。

現行学習指導要領等における学習活動の例

各教科等共通(総則等に配慮事項等として規定)

幼稚園等	小学校	中学校	高等学校	
環境(人やもの)とのかかわりを通じた主体的な活動(自発的な活動としての遊び)の中の学習) ◆協同的な学び ◆自然などに好奇心・探究心をもってかかわり生活や遊びに取り入れようとする活動 ◆言葉による伝え合いができるようにする言語活動 ◆生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ活動 ◆進んで自分の体を動かし楽しさを味わう活動	◆基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動			
	◆言語活動			
	◆体験的な学習			※総則に教育課程編成の一般方針として規定
	◆問題解決的な学習			
	◆自主的、自発的な学習			
	◆学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動			
	◆コンピューターなどの情報手段に慣れ親しみ、基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動	◆情報モラルを身に付け、コンピューターなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにするための学習活動	◆情報モラルを身に付け、コンピューターなどの情報手段を適切かつ実践的、主体的に活用できるようにするための学習活動	
	◆読書活動			

<小学校学習指導要領における学習活動の例(各教科等)>

国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作
<p>言語活動 (日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論など)</p> <p>学習過程の明確化 (目的を明確にして必要な情報を収集し、考えを発信するなど自ら学び課題を解決していくための学習過程を踏まえ、指導事項を構成)</p>	<p>問題解決的な学習 (社会的事象を観察したり具体的に調査したりするとともに、地図や地球儀、統計、年表などの基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の特色や意味などについて考え、調べたことや考えたことを表現する)</p>	<p>算数的活動 (児童が目的意識をもって主体的に取り組み、新たな性質や考え方を見いだそうしたり、具体的な課題を解決しようとしたり、算数の知識をもとに発展的・応用的に考えたり、考えたことなど表現したり、説明したりする活動)</p>	<p>問題解決の活動 (児童が自然に親しむことによって見いだした問題に対して、予想や仮説をもち、それらを基にして観察、実験などの計画や方法を工夫して考え、行い、結果を整理し、相互に話し合う中から科学的な見方や考え方を身につける学習)</p>	<p>具体的な活動や体験を通じた学習 (身近な環境に直接働きかけるとともに、そこでの楽しさや気付いたことを表現するなどの創造的な学習活動)</p>	<p>表現及び鑑賞の活動 (音楽の特徴を感じ取りながら、思いや意図をもって表現(歌唱・器楽・音楽づくりにしたり、感じ取ったことを言葉で表すなどして音楽を味わって聴いたりする学習活動)</p>	<p>表現及び鑑賞の活動 (感じたことなどを造形的に表すことを通して、発想や構想の能力、創造的な技能を高める表現の活動と、作品などを見たり、それについて話したりすることを通して、よさや美しさなどを感じ取り見方を深める鑑賞の能力を高める鑑賞の活動)</p>
家庭	体育	道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	
<p>衣食住などに関する実践的・体験的な活動や問題解決的な学習 (実習や観察、調査、実験などを通して、実感を伴って理解する学習活動や、自分の生活における課題を解決するために言葉や図表などを用いて生活をよりよくする方法を考えたり、説明したりするなどの学習活動)</p>	<p>運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習 (仲間と仲良く運動に取り組み、各種の運動についての関心や意欲を高めるとともに、自分やグループの課題の解決を目指して思考し判断する学習)</p> <p>健康・安全について身近な学習課題を発見し、解決する学習 (日常生活の体験や事例などを用いて健康課題の解決方法を考える学習、応急手当などの実習、実験などを取り入れて理解を深める学習)</p>	<p>人間としての生き方についての考えを深める学習</p>	<p>外国語による体験的なコミュニケーション活動 (外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う活動)</p>	<p>横断的・総合的な学習や探究的な学習 (現代社会の課題などについて、課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の探究プロセスを発展的に繰り返していく学習活動)</p>	<p>望ましい集団活動 (よりよい学級や学校の生活づくりを目指し、一人一人の児童が互いのよさや可能性を認め、生かし、伸ばし合うことができるような、話し合い活動などの実践的な方法による集団活動)</p>	

<中学校学習指導要領における学習活動の例(各教科等)>

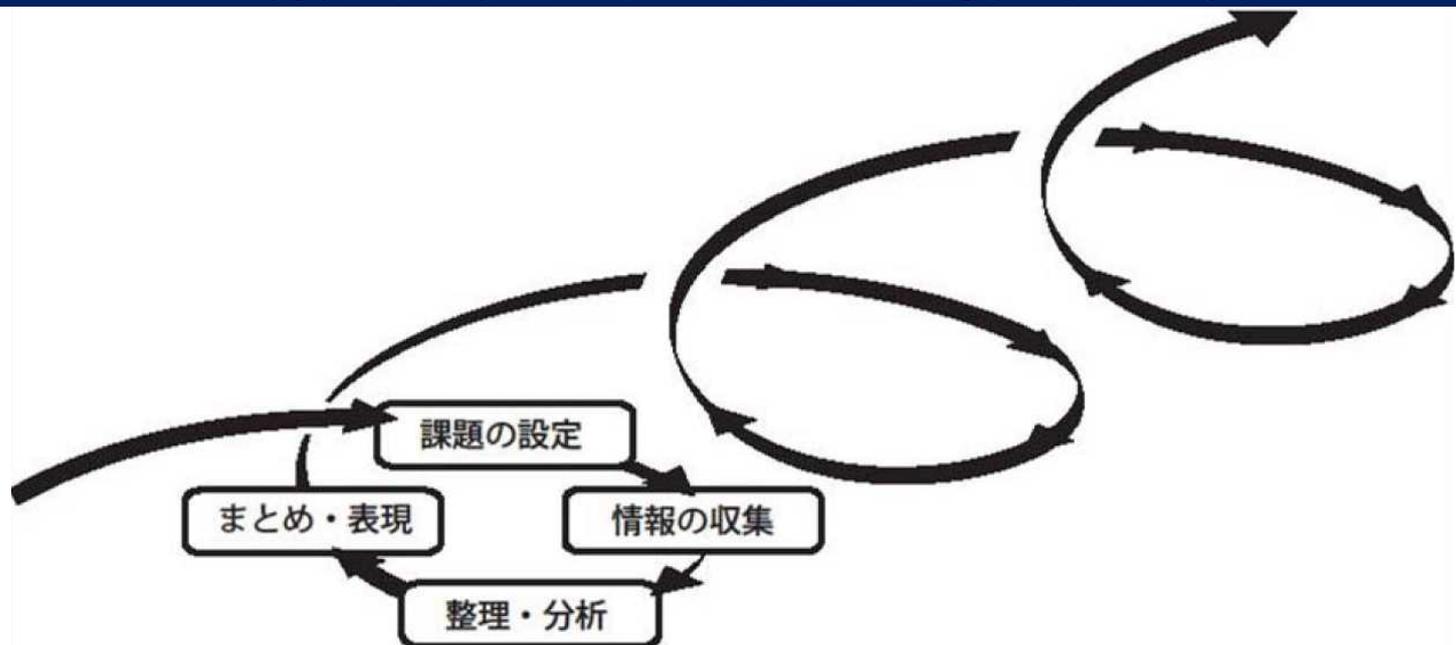
国語	社会	数学	理科	音楽	美術
<p>言語活動 (社会生活に必要とされる発表、案内、報告、編集、鑑賞、批評など)</p> <p>学習過程の明確化 (目的を明確にして必要な情報を収集し、考えを発信するなど自ら学び課題を解決していくための学習過程を踏まえ、指導事項を構成)</p>	<p>課題追究的な学習 (地理的事象について、地域調査などの作業や体験を伴う学習や課題を設定し追究する学習など)</p> <p>(歴史的事象の意味・意義や特色、事象間の関連について、文献や絵図などの資料を活用しながら説明、追究、意見交換するなどの学習)</p> <p>(現代の社会的事象について、具体的な事例を通じて事実を正確に捉え、公正に判断し表現する活動)</p>	<p>数学的活動 (既習の数学をもとに数や図形の性質などを見だし発展させる活動、日常生活や社会で数学を利用する活動、数学的な表現を用いて根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動)</p>	<p>科学的に探究する学習 (自然の事物・現象の中に問題を見だし、予想や仮説を設定し、それらを基に観察、実験などを計画・実行し、得られた結果を分析して解釈して、相互に話し合う中から科学的な見方や考え方を養うなどの学習)</p>	<p>表現及び鑑賞の幅広い活動 (音楽的な感受を支えとして、思考・判断し、思いや意図をもって表現(歌唱・器楽・創作)したり、音楽とその背景となる文化・歴史、伝統などと関連付け、解釈したり価値を考えたりしてよさや美しさを味わって聴いたりする学習活動)</p>	<p>表現及び鑑賞の幅広い活動 (主体的に表したいことを基に、思考・判断し、表現することを通して、発想や構想の能力と、創造的な技能を育成する表現の活動と、身の回りの造形や美術作品、文化遺産などから主体的によさや美しさなどを感じ取り味わったり、美術文化についての理解を深めたりする鑑賞の能力を育成する鑑賞の活動)</p>
保健体育	技術・家庭	外国語	道徳	総合的な学習の時間	特別活動
<p>運動の合理的な実践を通じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習 (科学的理解に基づく運動の実践により、各種の運動についての関心や公正、協力、責任、参画などの意欲を高めるとともに、自己やグループの課題の解決を目指して思考し判断する学習)</p> <p>健康・安全についての課題を科学的に解決する学習 (個人生活を中心とした健康課題について、生活経験や事例、健康情報などを活用しながら科学的に理解し、解決の方法を考える学習)</p>	<p>ものづくりや衣食住などに関する実践的・体験的な活動や問題解決的な学習 (実習や観察・実験、見学、調査・研究などの結果を整理し考察する学習活動、生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明したりする学習活動、計画・設計して具体的な物を創造する学習活動)</p>	<p>外国語による4技能にわたるコミュニケーション活動 (外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う活動)</p>	<p>人間としての生き方についての考えを深める学習</p>	<p>横断的・総合的な学習や探究的な学習 (現代社会の課題などについて、課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の探究プロセスを発展的に繰り返していく学習活動)</p>	<p>望ましい集団活動 (学級や学校、社会の一員として、互いに理解し合い、高め合い、集団としての改善・向上を図っていけるような、話し合い活動などの実践的な方法による集団活動)</p>

<高等学校学習指導要領における学習活動の例(各教科等)>

国語	地理歴史	公民	数学	理科	保健体育
<p>言語活動 (社会人として必要とされる話合いや討論、発表、説明や意見の文章、随筆を書くなどの言語活動(国語総合の例))</p> <p>学習過程の明確化 (目的を明確にして必要な情報を収集し、考えを発信するなど自ら学び課題を解決していくための学習過程を踏まえ、指導事項を構成)</p>	<p>課題探究的な学習 (地図や年表を読みかつ作成すること、各種の統計、年鑑、白書、画像、新聞、読み物その他の資料を収集・選択し、それらを読み取り解釈すること、観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすることなど様々な学習活動)</p>	<p>課題探究的な学習 (各種の統計、年鑑、白書、新聞、読み物、地図その他の資料を収集、選択し、それらを読み取り解釈すること、観察、見学及び調査・研究したことを発表したり報告書にまとめたりすることなど様々な学習活動)</p>	<p>数学的活動 (自ら課題を見だし、解決するための構想を立て、考察・処理し、その過程を振り返って得られた結果の意義を考えたり、それを発展させたりする活動、学習した内容を生活と関連付け、具体的な事象の考察に活用する活動、自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり、議論したりする活動)</p>	<p>探究的な学習活動 (自然の事物・現象の中に問題を見だし、予想や仮説を設定し、それらを基に観察、実験などを計画・実行し、得られた結果を分析して解釈して、討論などを行いながら考えを深め科学的な自然観を養うなどの学習)</p>	<p>運動の合理的・計画的な実践を通じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習</p> <p>(科学的理解に基づく運動の計画的な実践により、各種の運動についての関心や公正、協力、責任、参画などの意欲を高めるとともに、運動を継続するための自己やグループの課題の解決や生涯スポーツの設計等を目指して思考し判断する学習)</p> <p>健康・安全についての課題を科学的・総合的に解決する学習</p> <p>(個人及び社会生活を中心とした健康課題について、事例や健康情報などを分析したり、対話をしたりしながら総合的に考え、適切な意志決定・行動選択をするなどの学習)</p>
芸術	外国語	家庭	情報	総合的な学習の時間	特別活動
<p>芸術の幅広い活動 (音楽、美術、工芸、書道において、芸術的な捉え方や考え方を深化させたり、それを自ら表現したりすることや、芸術的な価値意識を高め、新たな価値を見いだしたり、芸術文化についての理解を深めたり、創造的な能力を高めたりする表現及び鑑賞の幅広い活動)</p>	<p>外国語による4技能にわたるコミュニケーション活動 (外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う活動)</p>	<p>生活における様々な事象に関わる実践的・体験的な活動や問題解決的な学習 (調査・研究、観察・見学、就業体験、交流活動等を通して理解する学習活動、生活上の課題を解決するために言葉や概念などを用いて考察する活動、判断が必要な場面を設けて根拠を論述したり最適な解決方法を探究したりする活動、他者との協同的な関係を築く活動など)</p>	<p>情報や情報手段を適切に活用するための主体的・実践的な学習活動 (情報手段を適切に活用した情報の収集・処理・発信等を通して、情報の信頼性・信憑性等を考察する活動、コミュニケーション能力や問題解決能力を育む活動、情報に対する責任について考えさせる活動並びにこれらの活動を評価・改善する活動など)</p>	<p>横断的・総合的な学習や探究的な学習 (現代社会の課題などについて、課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の探究プロセスを発展的に繰り返していく学習活動)</p>	<p>望ましい集団活動 (学級や学校、社会の一員として、互いに理解し合い、高め合い、集団としての改善・向上を図っていきけるような、話合い活動などの実践的な方法による集団活動)</p>

119

(参考) 総合的な学習の時間における探究的な学習における児童・生徒の学習の姿



■ 日常生活や社会に目を向け、児童・生徒が自ら課題を設定する。

- 探究の過程を経由する。
- ① 課題の設定
 - ② 情報の収集
 - ③ 整理・分析
 - ④ まとめ・表現

■ 自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される

育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会(第8回)
平成25年8月30日配付資料を一部改訂
(西岡加名恵委員)

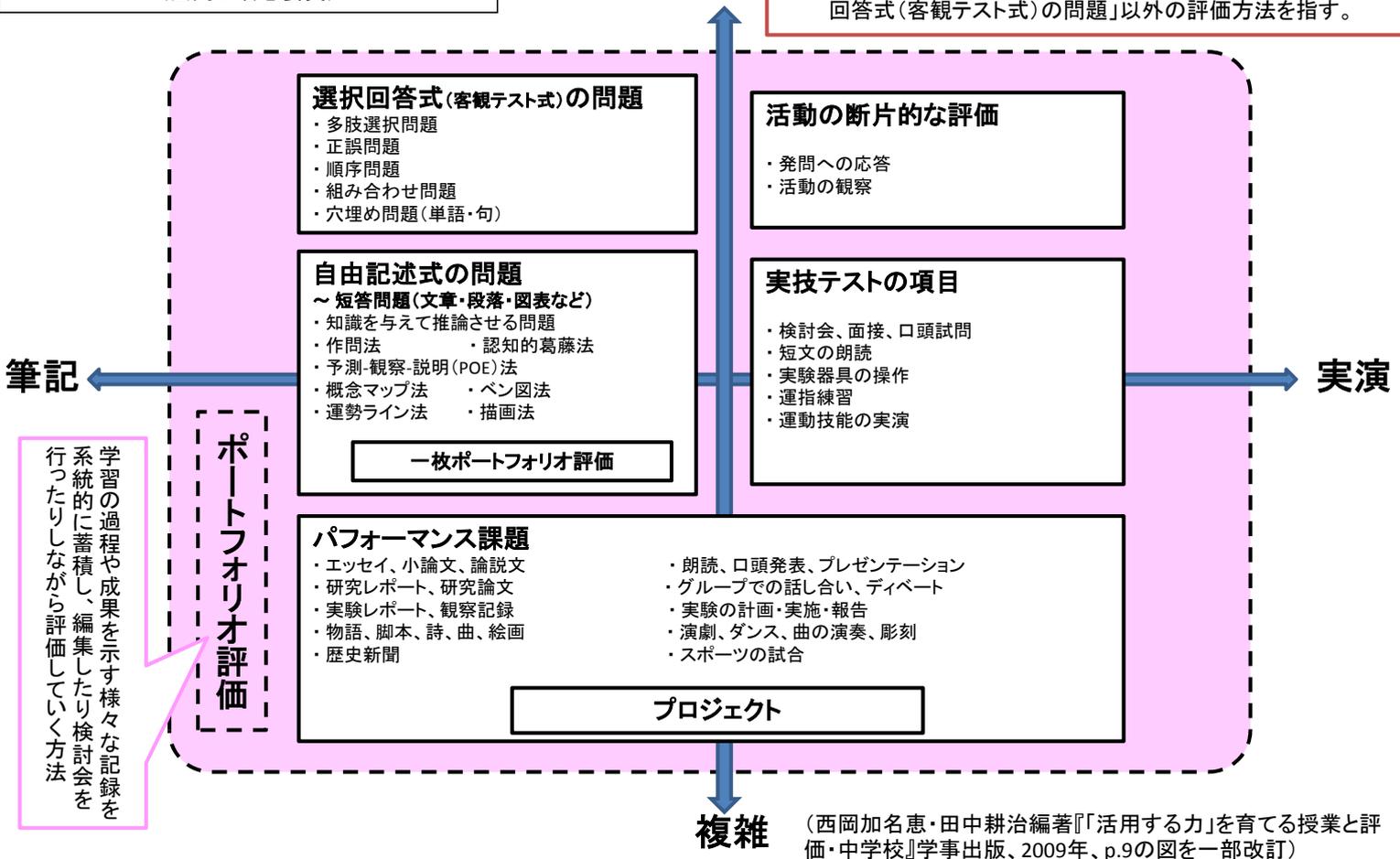
パフォーマンス評価

知識やスキルを使いこなす(活用・応用・総合する)ことを求めるような評価方法(問題や課題)の総称。多くの場合、「選択回答式(客観テスト式)の問題」以外の評価方法を指す。

単純

筆記

実演



「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の各教科において、大学教育を受けるために必要な能力としてどのような力を評価すべきか？(検討中の案)

平成27年7月23日
高大接続システム改革会議

別紙

<共通> 今後の社会の在り方・変容を踏まえれば、大学における学習や社会生活において、主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくために必要な、以下のような思考・判断・表現等を行えるかどうかますます重要となる(次ページのイメージ参照)。

(1)現在の状況から問題を発見・定義し、必要な情報を収集して解決のための構想を立て、計画を実行し、結果を振り返って次の問題解決につなげること(問題発見・解決とメタ認知)。

(2)問題発見・解決のプロセスの中でも、特に以下のような思考・判断・表現等が行えること。

①推論、仮説の形成、②学習を通じた創造的思考、③適切な判断・意思決定、④相手や状況に応じた表現や構成

(3)問題発見・解決のプロセスを、主体的に実行するだけではなく、他の考え方との共通点や相違点を整理したり、異なる考え方を統合させたりしながら実行していくこと。(cf. PISAの協同問題解決)

⇒各教科の知識をいかに効率的に評価するかではなく、上記の思考・判断・表現等を働かせる状況をいかに設定し評価するか、という観点からの作問へ(「問題」というものに関する考え方の質的転換)。

⇒大学教育において、こうした思考・判断・表現等をさらに磨いていくことを重視する、というメッセージとセットで打ち出すことが必要。また、高校教育において多様な進路に応じた必要な力を伸ばす中で、こうした思考・判断・表現等を行う力の育成を重視していくことも必要。

<国語> <英語>

例えば、
多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等を読み、そこから得た情報を整理して概要や要点等を把握するとともに、情報を統合するなどして自分の考えをまとめ、他の考え方との共通点や相違点等を示しながら、伝える相手や状況に応じて適切な語彙、表現、構成、文法を用いて効果的に伝えること。

<数学>

例えば、
事象から得られる情報を整理・統合して問題を設定し、解決の構想を立て、数量化・図形化・記号化などをして数学的に表現し、考察・処理して結果を得、その結果に基づきさらに推論したり傾向や可能性を判断したりすること。

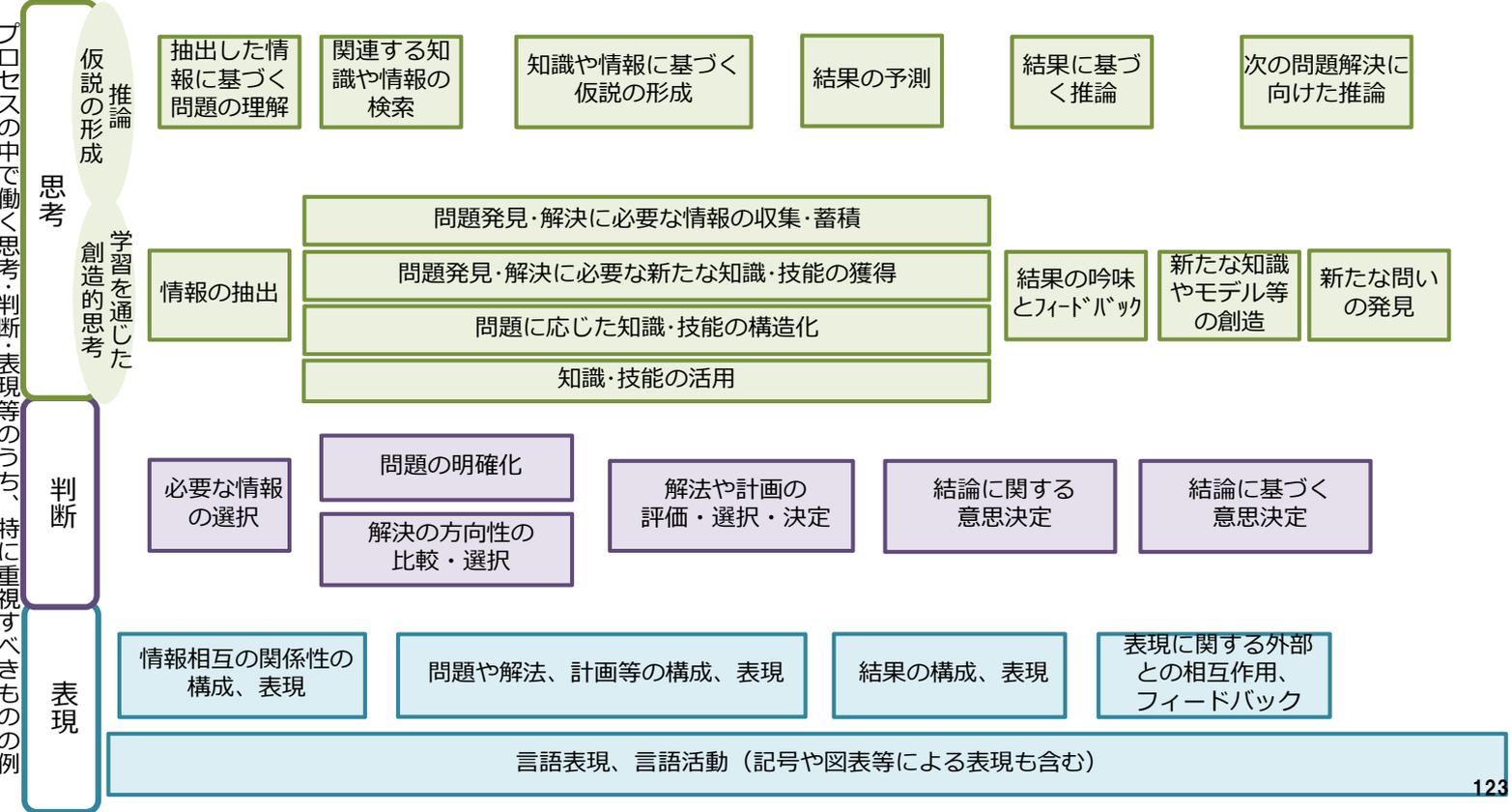
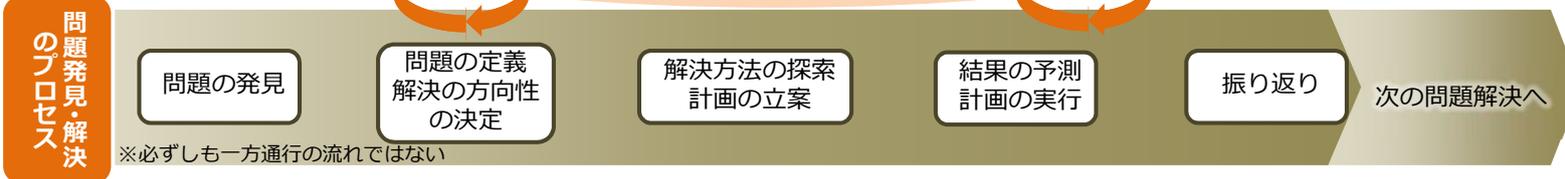
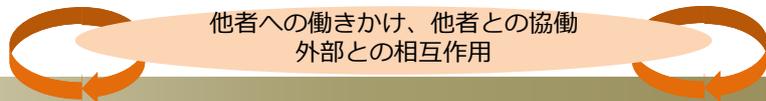
<理科>

例えば、
観察した自然事象の変化や特徴を捉え、そこから得られる情報を整理・統合しながら、問題を設定し仮説を立て予測し、それらを確かめるための観察・実験を計画して実践し、得られた結果から傾向等を読み取ったり、モデルや図表等で表現したりするとともに、結果に基づき推論したり、改善策を考えたりすること。

<地歴(世界史)>

例えば、
文章や年表、地図、図表等の資料から、歴史に関する情報を整理し、その時代の人々が直面した問題や現代的な視点からの課題を見いだし、その原因や影響、あるいは解決策等についての仮説を立て、諸資料に基づき多面的・多角的に考察し、その妥当性を検証し考えをまとめ、根拠に基づき表現すること。

引き続き教科ごとに専門的な検討を行い、作問イメージとともにさらに具体化。



「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の主な論点整理（検討・たたき台） システム改革会議（第3回）（6月18日）資料より

1. 高等学校基礎学力テスト（仮称）の基本的な考え方

- <目的>**
- 生徒自らが高校段階における基礎的な学習の達成度を客観的に把握し、自らの学力を対外的に提示できるようにすることを通じて、生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図る
- <対象者>**
- 生徒個人の希望に基づく参加を基本とし、学校単位での参加も可能とする。主な対象者をボリュームゾーンとなる平均的な学力層や学力面で課題のある層としつつ、できるだけ多くの参加を促すため、問題内容、実施時期・方法の工夫や、作問等での高校教員の参画を検討。

2. 現行学習指導要領下（平成31年度～）

- <対象教科・科目>**
- 円滑に導入する観点から、国語、数学、英語で実施（選択受検も可）。
（範囲としては、共通必修科目である「国語総合」「数学Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅰ」を上限）
- <問題の内容>**
- ボリュームゾーンとなる平均的な学力層や、底上げが必要な学力面で課題のある層の意欲を高めることを念頭に置きながら出題。
 - 知識・技能を中心としつつ、思考力・判断力・表現力等を問う問題も一部出題。
- <出題・解答・結果提供方式>**
- 試行を通してCBT-IRTを導入する方向で検討。 ※紙による試験実施も念頭に置きつつ検討。
 - 正誤式や多肢選択式を中心としつつ、多様な解答方式の導入を目指す。
 - 学習の目標を設けやすく、成果が実感しやすくなるよう、10段階以上の多段階で結果を提供。

<実施方法>

- 導入当初は、夏～秋を基本に高校2・3年で生徒の希望に応じ年間2回受験できる仕組みとし、随時見直し。
(CBT-IRTが円滑に導入された場合、実施時期・回数を制限せずに学校・生徒の都合に合わせて弾力的に運用することが可能。)
- 受験料は1回あたり数千円程度の低廉な価格設定となるよう検討。低所得世帯への支援策も併せ検討。

<活用の在り方>

- 上記1. に掲げる目的を前提としつつ、生徒の学習改善の観点から、高校での指導改善や国や都道府県等の教育施策の改善にも活用。
- 更に、学習意欲の低下が顕著な状態にある一定の推薦・AO入試の受験者層を特に念頭におきつつ、進学時等において生徒が基礎学力を把握・提示するため、又は大学等が基礎学力を把握するための方法として用いることも想定。
※ 大学入学者選抜で活用する場合には、原則として2年次の結果は活用しない方向で検討。
※ 就職時の活用も考えられるが、企業等に対してテストの結果をもって生徒の可能性が狭められることのないよう一定の配慮を求める。

<民間の知見の活用>

- 英語は、基礎的な学習到達度のきめ細かな評価、実施場所や費用負担、継続性・安定性に留意しつつ、4技能試験の実施に向けて、民間の資格・検定試験も積極的に活用する観点から、民間との連携の在り方について検討。

3. 次期学習指導要領下(平成35年度～)

- 高校生の基礎的な学習の達成度を把握する観点から、次期学習指導要領において示される必修科目を基本として実施。

125

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の主な論点整理(検討中のもの)**<目的・対象者>**

- 大学入学希望者を対象に、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主たる目的とし、十分な知識・技能の習得を前提に、思考力・判断力・表現力を中心に評価する。

<対象教科・科目>**【次期学習指導要領のもとでの基本的枠組み(平成36年度～)】**

- 次期学習指導要領の趣旨を十分に踏まえ、大学入学者選抜における共通テストとして、特に思考力、判断力、表現力を構成する諸能力をより適切に評価できるものとする。
- 【地歴・公民】次期学習指導要領の検討に留意しながら、例えば、歴史系科目においては歴史的思考力等を含め、思考力・判断力・表現力を構成する諸能力の判定機能を強化。
- 次期学習指導要領で導入が検討されている科目のうち、「数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行う新たな選択科目」に対応する科目の実施を検討。
- 【数学、理科】思考力・判断力・表現力を構成する諸能力に関する判定機能を強化。
- 【国語】次期学習指導要領の検討に留意しながら、例えば、言語を手掛かりとしながら、限られた情報のもとで物事を筋道立てて考え、的確に判断し、相手を想定して表現するなどの力の判定機能を強化。
- 【英語】次期指導要領の検討に留意しながら、例えば、情報を的確に理解し、語彙や文法の遣い方を適切に判断し活用しながら、自分の意見や考えを相手に適切に伝えるための、思考力・判断力・表現力を構成する諸能力を評価。
- 次期学習指導要領での教科「情報」に関する検討を踏まえ、対応する科目の実施を検討。

【現行学習指導要領下における基本的枠組み(平成32～35年度)】

- 次期学習指導要領改訂の議論の方向性を勘案しつつ、思考力・判断力・表現力を構成する諸能力をより適切に評価できるものとする。
- 試験の科目数について、現在の大学入試センター試験よりできるだけ簡素化。

126

＜出題・解答・成績提供方式＞

- 多肢選択式のほか、記述式、選択式でより深い思考力等を問う問題（例：連動型複数選択問題（仮称））などの導入を目指す。
- 記述式については、平成32～35年度は短文記述式、36年度以降はより文字数の多い記述式の導入を検討。
※ 採点体制、記述式導入によるコスト面、スケジュール面の課題、コンピュータ技術可能性等を検討する必要。
- CBTの導入により、様々な資料・動画の活用、記述式の導入、スピーキングの評価、適応型テストへの拡張等の展開が想定可能。
- 他方、環境整備等、導入に十分な準備の必要。
- 36年度以降の次期学習指導要領のもとでのテストからCBTを実施することとし、32～35年度間は試行に取り組む。
※ 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」におけるCBT導入の検討状況等も踏まえ、端末整備、システムの安定性等本格実施に向けた課題を検討。
- 大学や大学入学希望者に対し結果の多段階による表示による提供等、今後より専門的に検討する必要。
- 年複数回の実施には、難易度平準化のためIRT等の導入が必要（その際、問題の予備調査、多数の問題蓄積等の必要）。
- またテスト実施時期と高校教育の日程関係等の検討の必要。
- これらを踏まえ、年複数回実施の方法・日程等については、関係者の意見も聞きつつ十分な検討が必要。

＜英語における民間の知見の活用＞

- 4技能を重視する観点から、民間の資格・検定試験の知見を積極的に活用するなどの具体的な連携の在り方について、更に検討する必要。